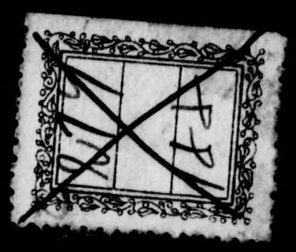
特



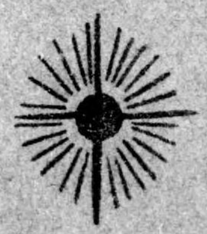
加藤一夫編

一般人叢書

第五編

村の三日間

イトスルト



洛陽堂版

特104
50

一般人叢書

加藤一夫編

第五編

隊唱歌の村、閭日三の村

旅人との對話、日記より

作イトスルト

加藤一夫譯

洛陽堂版

大正
6. 9. 19
内交

村の三日間

第一日　浮浪人

全く物新しい、以前は見た事もない或事が近頃吾々の田舍地方に表はれて來た。

八十戸程ある吾々の村に、毎日の樣に、六人から十二人位までの、ボロ着を着て飢え寒えて居る浮浪人が一夜の宿りを求めてやつて來る。

ボロ〳〵に破れた着物をきて、半分は裸體で、そして素足で、時としては病みわづらつて居る極端に汚ない此等の人民が村へやつて來て、そして村巡査の

所へ行く。すると巡査は、彼等が飢えたり雨露を浚ぐところがなくて死なない樣に彼等を村の住民——百姓のみを住民と見て——に割り當てる。巡査は彼等を、自分達の爲に十の室を造つて居る外に、事務室や別當室や洗濯部屋や又は下働き上働きの召使の部屋などと別に十の室も備へてある大地主の所に連れても行かなければ、または左程大きくはなくとも尙幾つかの空間のある祭司や監督や店商人等の所に連れても行かない。

妻も嫁も結婚前の娘もそして大小數多い子供達も混多(こつちや)になつてみんなの家族が一緒に、二間半、三間、三間半間口の一室に充め込むで居る百姓小屋に連れて行くのである。すると百姓家の主人はたゞにその飢え寒えたボロを纏うて嫌な匂のする汚ない人々に宿を貸してやるばかりでなく食物をさへ餐つてやる。

『まあ貴老、御自身で食卓について居て御覽なさいませ』ある年老ひたる百姓

家の主人が私に言つたことがある。『あんな人を食卓に招(よ)ばないわけにや行きませんよ。さうしなけりや人は何の報も受けないんですからなあ。ですから誰でもあんな人達に御飯を食べさしたりお茶を飲ましたりするむで御座いますよ』

此等は夜やつて來る手輩である。併し晝間でも二人三人、それどころでなく、時としては十人もそれ以上もやつて來て家毎を叩く。而も亦これだ。

『何うしてそんなことは出來ませんや……』

百姓家の内儀(かみ)さんは此等の浮浪人の殆んど凡てのものに、各々その人の有樣に應じて、薄くなり厚くなりパンの一片を切つて與へる——麥が次の收獲時まではもたない事を知りながら……

『もし遣つて來る者毎にみんなやつた日には一塊のパンも（百姓の黑パンの大

塊）一日たゞ續きやしませんよ』と二三の內儀さん達ちは私に言つたことがある。

『それで時には心を冷たうして斷はつてしまう者もあるんで御座いますよ』

そしてこれは毎日の樣に全露西亞國中に行はれて居るのである。毎年すばらしい勢で增して居る乞食や片輪者や流刑者や助けなき老年者や、そしてまた職業口のない勞働者の一隊が此等の最も難澁な荒仕事をして居る、最も貧しい階級の百姓達によつて生き——即ち寒さや飢から救はれ——且つ實際食べさせてもらつて居るのである。

吾々の町々には養育院もあり孤兒院もあり、社會救濟會社もあつて色々の種類の慈善機關が備つて居る。眩しく輝く電燈や寄木細工の床やそして奇麗な僕や給料を澤山とつて居る各種の給仕等の備はつて居るそれ等の會館や建物の中に幾千の助けなき色々の種類の者が救護されて居る。併しながらその救護され

て居る者が如何に多いと云つても、かうした制度のお蔭にはならないで、各自の基督敎的感情からして自ら進んで此の重いそして莫大な稅金を負擔するところの百姓によつてのみ養はれるところの、全露西亞を窮乏のうちに浮浪して居る此の莫大なる、數へられやしないが慥に莫大なる人民に比すれば實に大海の一粟たるに過ぎないのである。

かくの如き飢え寒えて汚ならしい虱の多い浮浪者が、百姓でない人民の寢床の中に——一週に一度でよい——寢さゝれたとするならば彼等富者は果して何と云ふであらうかを考へて見よ。而も百姓達はたゞに彼等に宿を貸すばかりでなく、彼等を食卓に招くにあらずんば「人自らの靈魂は何者をも受けない」と云つて、食を與へ茶を與へるのである。

サラートフだとかタンボーフだとかその他の縣の如き僻遠な土地の百性に至

つては巡査が浮浪人を彼等の家へ連れて來るまでも待たない、自らすゝむで彼等を受けて食を與へる。

そして眞實善良なる凡ての事業の場合に於けると同じく、此等の百性は自分が善事を成して居る事を意識せずしてやつて居る。而もそれは單に『人の靈魂のために』善事であるばかりでなく全ロシアの社會の爲めに甚だ大切な事である。何故ロシアの社會にとつて大切な事であるかと言へば、この農民と、而してその中に、しかく强固に動いて居る基督敎的感情とがなくば、單にこれ等幾千萬の不幸なる家なき浮浪者の運命のみならず、凡ての裕福に暮して居る人民、殊に田舍に家を持つて居る富者の運命が如何になり行くかゞわからないからである。

たゞ此等の家なき浮浪者がなつた、又ならされた窮乏と苦痛との狀態を考察

し、かつ彼等が當然陷らなければならぬ精神狀態を想像し、そしてこれ等の不幸なる人々が自己の生命を支ふる事にさへ困難して居るのに反して他方では此等のものを有り余るまで持つて居る者に向つて、彼等の位置からして當然に加へらるゝに至るべき暴行を抑壓する力は、たゞこれ等の百性達が彼等の爲めに成した此の扶助の効によると云ふ事を知るのは何よりも必要なことである。

それ故に、かくの如く貧窮と絶望のどん底に沈み込むだ後に——もしくは大部分は沈まされた後に、漂浪し飢え寒え家なき者からして、吾々富者が交擊せられない樣に保護してくれるものは、慈善事業の力でもなく、また警察や裁判所を持つて居る政府の力でもない。吾々はたゞロシア國民の根柢の力とも言ふべきこの農民によつて養はれ支えられて居ると同じに保護されて居るのである。

然り、この莫大なるロシア農民の間に萬人同胞の深刻なる宗敎的意識がなか

つたならば絶望のどん底に沈淪して居る此等の浮浪者達は、警察力等には毫も恐るゝ事なく（田舎へ行くとそんな警察力なんかは殆んどない、またあらう筈がない）とつくの昔に富者の家を破壞したのみならず、逢ふ程のものは悉く殺してしまつたに相違ない。故に强盗に逢つた人の話や、强盗の爲めに殺された人の話しを聞いたり讀んだりした時にも恐れたり驚いたりすべきではない。寧ろか樣な事が極めて稀にしか起らないのはこの不幸なる浮浪民に向つてなされて居るこれ等の農民の私なき救助の力である事を了解し且つ記憶すべきである

毎日十人から十五人までの人が吾々の家にやつて來る、その中或者は純粹の乞食である、彼等はある理由のもとに、生活の手段としてこの途を選んだので出來得る限り奇麗な着物も着、靴も穿き、そして貰ひ集めたものを入れる爲めには袋を用意して、田舎の方へ放浪ひ行く。その中には盲人もあり片手片足の

失つた者もある、そしてまた極稀ではあるがその間に女や小供のある事もある。併しこれ等はほんの小部分である。現時やつて來る乞食の大部分は旅行者である。大概は若くて、乞食袋も持つて居なければ片輪者でもない。彼等は實に、みすぼらしい裝をして居る、裸足で半裸体で脊せ衰へて、そして寒さにぶる〳〵震へて居る、彼等に尋ねて見よ。『君は何處に行くんだね』と、答へは何時も同じである、『何か職業を探しに』もしくは『職業を探しに行つて來ましたが何にもないので歸らうとして居る所です、仕事は何處にもありません、働き口はみんな一杯になつちまつて居ます』である、此等の人は多くは追放から歸りつゝあるものである。

數日前の事であつた。私がやつと目さめたかさめないうちに、僕のイリヤワシリーエウッチは私に告げた。

『玄關の近くで五人の浮浪人が待つて居ます』
『その机の上にある金を持つて行つてやつて呉れ』と私は言つた。
イリヤ、ワシリエウイッチはその金をとつた。そして慣習に從つて行つて皆に五コペックスづゝ與へた。殆んど一時間程經つて私は玄關の方へ行つた。すると恐ろしく破れた着物を着て、ボロ〳〵に切れた長靴を穿いた、そして瞼が腫れて眼の球が不安に動いて居る病人顏の小さな男が私に頭を下げそして一つの證明書を差出した。
『何か貰つたかね』
『閣下、五コペックスでは何うしやうもありませんよ……閣下どうか私の身になつて考へて見て下さい。どうか閣下、御覽下さい……この裝を』彼は私に彼の服を見せて『何處に行かれませうに閣下（一語毎に閣下である。その癖

彼の顏は憎惡に充ちて居る）『何うしませうに。何處へ行かれませうに』
私は何人にも同じ樣に與へるのである事を告げたが彼は尙續け樣に切願したそしてその證明書を讀んでくれと言つた。私は拒むだ。彼は跪いた。どうか去つてくれと私は乞うた。
『よろしう御座います。では私は愈々自殺をしなければならないでせう。……それは私に殘された最後の手段です。……何かやつて下さい。どんなつまらんものでも』
私は彼に廿コペックスを與へた。而して彼は非常に怒つて呟きながら去つた。
富者に向つて、自分の分を當然と强請するの權利があるかの如くに思つて居る、こんな强情つぱりな乞食は隨分と多い。彼等は大概文字を持つて居る。その中の或者は革命黨の感化を受けて居て中々よく讀める者もある。

彼等は普通古風な乞食とは違つて、富者をもつて慈善をして彼等の靈を救はんと欲して居る人民とは見ないで、勞働者の血を吸ふ路盜か盜棒と見る。そしてこの種の乞食は自らは勞働せず、また巧に勞働を避けて居るにも拘らず、尙自らを勞働者の名の下に置いて人民の盜棒——即ち富豪——を憎みまた心から憎むことを義とするのみならず、憎むべき義務を負うて居るものとする。而して若し富者に向つて剛然として要請せずして温和に乞ふ樣な事があつたとしてもそれはたゞの僞りに過ぎないのである。

かうした種類のものは隨分多い。而もその多くは『それは自分がわるいからだ』と言ひたくなる樣な泥酔者だ。併しこれとはまた全く型の違つた浮浪人も夥しい。彼等は温和で謙遜でそして非常に哀れである。思へば悲慘な事である。

脊の高い立派な男であつた。短い破れたヂャゲットを着たつきりで、その足

に穿いて居る長靴も粗末な而もボロ〳〵になつたものであつた。彼は賢しい善い顏をして居た。帽子をとつて普通のやり方で私に物を乞ふたので私は少しばかりのものを與へた。すると彼は禮を言つた。私は彼に何處から來て何處へ行くのだと尋ねた。

『ペテルスブルグから、トゥウラー縣の自分の村に歸らうと思つて居ます』

私は訊うた、『何故、歩るいて歸るんだね』

『それには込み入つた事情があるんです』肩を聳かして彼は答へた。

その話をしてきかして呉れないかと彼に乞ふと、彼は疑ふ方もなき誠實をもつて私に語つた。

『私はペテルスブルグの或事務所で善い位置を占めて居ました。月に三十ルーブルづゝとつて愉快に暮して居ました。私はあなたの「戰爭と平和」と『アン

ナ●カレニナ」を讀みました』かう言つて彼は愉快さうに微笑した。『すると宅に居る私の家内の者等はシベリアのトムスク縣に移住する考を起したのです』

彼等は彼に故郷にある彼の土地を賣らないかと手紙を寄越した、彼は同意した。彼の家族は出發した、併しシベリアで彼等に配當せられた土地は價値のないものであつた。持つて行つたものは悉く費してしまつて、彼等は遂に再び故里へ歸つて來た。そして土地がなくなつたので今は前の村の長屋に住んで日傭働きをして居る。ところが丁度その時彼はペテルスブルグで職を失うやうな事になつた。それは彼の所依ではなかつた。彼の働いて居た强固な會社が破産したので雇人を解雇したのだ、『そして丁度その時、實を言ふと私は或る女と知り合ひになりました』と彼は再び笑を漏らした。『その女は全く私を惑亂してしまひました。……私はよく人を助けて居ました、併し今は何と輕薄な男になつた事で

せう。あゝ併し神は無慈悲ぢやありません、何とかなる事でせう』

彼が賢しい强健な活動的な男子である事は明である。而も引續いてやつて來た不幸の連鎖は彼をして今日の狀態に陷らしめたのである。

他の一例をとる。彼の脚にはボロ片がぐるぐる卷いてあつて、腰には繩の帶をまとつてあつた。彼の服は極端に着古したもので、小さな穴だらけであつた。而もその穴は裂けたのではなく朽ち果てたのである事は明白であつた。彼の顏は骨が高くとび出て、快活で、智慮深く且つ謹直であつた。私は例の如く五コペックスを彼に與へた。そして話し初めた。彼は官憲の追放に逢つて今迄ウイアトカに流されて居たのであつた。

彼處でも隨分苦しかつたが此所では尙更に困つた。彼は今住み馴れたリヤザンに行かうとして居るのであつた。私は彼の職業が何であつたかをきいた。『新

閉屋だつたんです。新聞を廻して居ました』
『何で君は追放されたのかね』
『禁示された文章を賣つたからなのです』
私達は革命黨の事について語り初めた。私は彼に私の意見を告げた。罪は吾と自らにある、政府と云ふが如き巨大なる勢力は力を以つてしては破壞されない『吾々の外部の惡は、たゞ吾々の內部の惡を破壞してしまつた時にのみ破壞される』と私は言つた。
『それはさうです、併し長くはないでせう』
『それは吾々の如何によりかゝつて居るんだ』
『私はあなたの革命に關する著書を讀みました』
『あれは俺のぢやない、併し俺の意見はあれと一致して居る』

『私はあなたの本を少々頂きたいと思ひますが』
『いゝとも……だがその本はまた君を惱まさなければ可いがね。まあ一番害にならないのをやらう』
『いやそんな事は關いません、私はもう何も恐れるものはありません、私には牢屋の方が却つてこんな生活よりはいゝんです。私は牢屋を恐れません……寧ろ時々それを望む位です』と悲しげに彼は言つた。
『そんなに澤山の精力が無駄に費されるのは悲しいことぢやないか』と私は言つた。『君の樣な男がどうしてそんなに自分の生命を壞すんだね……兎に角君は今何うせうとするんだ』
『私?』私の顏を一心に見つめながら彼は言つた。最初、過去の出來事や普通の問題について語つて居る間は彼は大膽に且つ喜ばしげに私に答へた。併しな

から私達の會話が彼の個人的の事にわたつて來た時、そして私が彼に同情して居る事に氣がつくや否や、彼は顏をそむけて服の袖で眼を掩うた。私は彼の後頭部が震へて居るのを見た。

而して、かうした人々が何麼に多い事だらう。

哀れむべくまた痛はしい。彼等も亦一歩蹈み出さば、如何に親切なる人をすらどんづめまで追ひやらうとして居る絶望の道の初まる闕の上に立つて居るのである。

『吾等の文明は飢渴である樣に見える』とヘンリー・ジョージは言つて居る。

『壞頽の力は既に己にその內部に於て發展しつゝある。前時代の文明に對してハンス人やバンダル人がなしたと同じ事を、今日、吾等の文明に對しても成すであらうところの蠻人が、沙漠や森の中ではなく市井の細民窟又は大道に於て

掠奪されて居る』

さうだ！　ヘンリー・ジョージが廿年以前に豫言した事は、今や吾々の眼前に——玆ロシアに於ては最も盛に——表はれつつある。たゞその上にのみ凡ての社會組織が立ち、また立ち得るところの唯一の土臺を覆すことに餘念なき吾々の政府の驚くべき盲目に向つて感謝せよ。ヘンリー・ジョージの預言したバンダルス人はロシアの國に於て吾々の間に既に已に存して居る。而してこれらの罪に定められたるバンダルス人が、深刻なる宗教的意識を有つて居る吾々人民の間に於て特に恐れられて居ると云つては不思議の樣だが實際彼等は特にロシアに於て恐れられて居る。と云ふのは歐羅巴に於ては、しかく强固に發展して居る集會や禮儀や輿論を檢束するところの原理が吾々の間にはないからである。吾々にありては、眞實にして深刻なる宗教感情を有つて居るか、然らずんば——

Sténka Rázins や Pougatchéf の如く――制御の原理を全然有つて居ないかの何れかである。而して恐るべきは、此の Sténka や Pougatchéf の軍隊が益々増大して居る事である。そして感謝すべきは今日吾人の政府が行つて居る恐るべき警察的暴力や亂心的追放や投獄や流刑や城塞や、または日々の處刑等の如き Pougachéf 的行爲に向つてである。

かくの如き行爲は、やつと道德的檢束の最後の絆から Sténka Rázins を解放する。

『もしも敎育ある紳士達がかくの如く行ふならば吾々がかくするのは當然だ』と彼等は言ひ且つ考へる。

私はその階級の人々、重に追放者から屢々手紙を受ける。彼等は私が、暴力をもて惡に抵抗すべからざることを書いて居ることを知つて居る、而も彼等は

それを非常な熱心をもつて、非文法的に曲解して、政府や富豪が貧民に向つて成しつゝある事に對しては、たゞ一の途『復讐せよ、復讐せよ、復讐せよ』をもつて答へ得る、また答へねばならぬと言つて居る。

まことに、吾々の政府の盲目は實に驚くべきである。彼等が、その敵から武器を奪はうとして爲す事はたゞその敵の數と精力をますのみである事を知らない。まことに、此等の人民は實に恐ろしい。政府にとつて、富者にとつて、または富者の間に住んで居る者にとつて。

併し此等の人民が鼓吹する恐怖の感の外に尙他の感じがある。それはこの恐れよりも更に〳〵命令的である。そしてまた、引續き〳〵やつて來た出來事の爲めに遂にかの恐るべき浮浪的狀態に陷つた此等の人々に對して經驗しないでは居られないところのものである。それは即ち羞耻と同情とに屬するものであ

る。

そして實に、かゝる狀態に陷つて居ない吾々をして、或る何等かの途に於てこのロシア人生活の恐るべき此の新しい現象に答へないでは居られなくするところのものは、かの恐怖の感の故ではなくて、寧ろこの羞耻と哀憐との爲めである。

第二日　生者死者

仕事にとりかゝつて居ると、イーリヤ・ワシリーエウヰッチはそつと入つて來て、私の仕事を妨げるのを躊躇しながら、數人の旅人と一人の女が私に逢ひたいと云つて長い間待つて居ること告げた。

『これを持つて行つてやつて呉れ』と私は言つた

『女は何か用があつて參つた樣です』

私は、女に暫く待つてもらう樣にと彼に言ひおいて仕事を續けた。暫く經つて私は外に出たが、或る甚だ貧しい裝の、時候柄餘りに薄着をした痩せぎすな長顏の女が家の隅の方からやつて來るのを見たまでは全くその女の事を忘れて居た

『何の用だね、一體何うしたんだね』

『私はあなた様に御目にかゝつてと思ひまして』
『うむ……そしてそれは何で、何の事で』
『あなた様に逢つて』
『うむ、そして何で』
『無法にとられてしまつたんで御座います……私は三人の子供と一緒に殘されたんです』
『誰がとられたんだね、そして何處に』
『うちの人が……クラピウニーへ送られたので御座います』
『何故だね、また何の爲めに』
『兵隊にで御座います、ですがそれは無法なんです……たつた一人の稼ぎ手なんですもの。私達はあの人か居なくちや暮して行けないんです……どうか

御助けなさつて下さいまし旦那樣』
『だが、どうだね、お前の家では男と云ふのはお前の夫きりなのかね』
『全くさうで御座います……たつた一人つきりなんで御座います』
『ぢやあ、どうしてとられたんだね、もしたつた一人の男なら』
『そんな事はどうしてわかりませう……ですがこんなに私は子供をおいて殘されて居るので御座います。私はもう死ぬより外に仕樣がなくなつて居るので御座います……たゞ子供がかわいさうで御座いまして。で私の最後の望みは旦那樣の御親切によりすがるりよ外はないので御座います、全くそれは無法なんですもの』
私は彼女の村の名と彼女の性名を書きとつた、しらべて見た上で何かと通知してやると告げた。

『お助け下さいませ、ほんの僅ばつかでも良う御座んすから……子供等は飢えて居ますし眞實眞正なところ私は痂蓋位の物もないので御座います、中にも一番かわいさうなのは赤ん坊で御座います……私には乳が御座いませんので。寧そ死んでくれゝばよいのですが』

『お前のところには牛はないのかね』と私は言つた。

『牛をですつて、どうして旦那様、私達は皆、飢え死しかゝつて居るんですもの』

破れた上衣を着てぶる〳〵震ひながら彼女は言つた。

彼女をかへして私は例の散歩に出かけやうとした。すると私達と同居して居る醫師は、丁度その兵士の妻の來た村と巡査駐在所のある村に患者を見舞ひに行かうとして居たので私は彼と一緒に橇を驅つた。

醫士が患者を見に行つた間に私は駐在所に行つた。

署長は居なかつた、書記も居なかつた、たゞ副書記が居た、それは前から私の知つて居た悧巧な青年であつた、私は彼に女の夫の事を尋ねた、そしてその家族に於ける唯一人の男を何で徵兵にとつたかと訊問した。

副書記は事項を一々詳しく究べて見て、彼の女の家では男は彼女の夫のみでない、彼には一人の兄弟があると答へた。

『ぢやあ何うしてあの女は男は彼きりだと言つたんだらう』

『それは嘘を言つたんですよ、あんな手輩は何時も嘘を言ひますからねえ』と彼は笑ひながら答へた。

私は尙私の關係して居る他の二三の用件について尋ねて居た、するとそこへ醫士が患者のところから歸つて來た。そこで私達は兵士の妻の住んで居る村の方へ乘つた。併し私達がその村をはづれやうとすると十二歳位の娘の子が道を

横ぎつて私達の方へやつて來た。
『あなたを頼みに來た人でせう』と私は醫士に云つた。
『いゝえ、旦那樣に用がありまして』と娘は私に言つた。
『何だね』
『私は旦那樣に御願ひしたいので御座います、お阿母さんが死んでしまつて私達五人が孤兒になつたので御座います、お助け下さい……私達の困難を思ひやつて下さいまし』
『お前は何處から來たの』
娘は或る煉瓦造りの家を指した。それはまづい建物ではなかつた。
『此處から……あれが私の家です、まあ來て見て下さい』
私は橋から下りてその家の方へ行つた。一人の婦人が出て來て私に入れと言

つた。その女は孤兒の叔母であつた。私は大きな奇麗な室に入つた、子供は四人とも皆、そこに居た、長女の外に男の兒が二人、女の兒が一人、そして他に二歳ばかりの男の兒、叔母は私にその家族の有樣を悉く告げた。二年前に父は鑛山で殺された、寡婦はその償金をとらうとしたが駄目だつた、彼女は四人の子供を殘されて——五番目のはまだ生れて居なかつた——獨力で大に苦闘した、最初は日傭を雇つて土地を耕して居た、併し夫が居ないので益々非運に傾いて行つた。初めに乳牛を賣らなければならなかつた、次には馬を賣つた、で遂に漸く二つの羊が殘つたきりになつた、而も尙彼等は何とかして生活をしなければならなかつた。ところが不運はまだそれでは止まらなかつた。二月前にその女自身も亦病み付いて、そして到々十二歳の兒を頭に、五人の子供を殘して死んでしまつた。

『子供等も自分で出來る丈けの事をして暮して行かにやなりませんし私も助けるつもりで御座いますが何の役にも立ちませんあの兒等が何うなつて行く事だか知りませんが、いつそ死んでしまつて居たらと思ひますよ……誰かゞこの子供等を何處かの孤兒院へいれてやつて下さればよいのですが——皆でなくてもせめては一人か二人でも』

長女は明らかに私と叔母との談話を了解して居た、そして私達の話の間々に口を挿んだ。

『小つちやいニッキーだけでも何處かへやれたらねえ、大變だわ、一寸の間だつて放棄つておけないわねえ』

小ちやい姉さんと何か愉快に笑ひころがつて居て、そしてもとより毫も叔母の心も知らないで居る丈夫な二歳の腕白兒を指して彼女は言つた。

私はその子供の中、一人か二人位を或る孤兒院に入れる樣に骨折つて見やうと約束した。長女は私に感謝した、そして何時返事をきゝに行つてよいかを尋ねた、凡ての子供の眼は、ニッキーの眼までも私に注がれた、彼等の爲めに何事をかなし得る妖靈でいもあるやうに。

その家を辭して樞の置かれてある所に行きつくまでに私は一人の老人に逢つた。彼は私に頭をさげて、そして直ちにこの同じ孤兒に就いて語り初めた。

彼は言つた『悲慘な事で御座います。あの兒等を見ると可哀想でたまりません。ですがあの一番上の阿魔つ子はそりやよく世話を見ますよ——丁度母親か何かの樣にな。神樣があの娘をお助け下さつたのも大變なもので御座います。隣近所の者等が決して彼奴等を捨てやしませんでしたのは全く神樣の御恩みで御座います。さうでなきや彼の餓鬼等は夙(とッ)疾うの昔に死んでしまつてゐますよ

……彼等なら御助けになつても害になる樣な奴等で御座いませんよ」彼はかう言つて私に助けてやれとつけ加へた。

私はその老人や叔母や小娘と別れて醫士と共に橇にのつて今朝やつて來た女の所へ行つた。

私達の行きついた最初の家で、私はその女の住所をきいた、ところがそれは私のよく知つて居る寡婦の家であつた、彼女は實に執拗に、押し強く強請りつくに妙を得て居る女で、さうしてもらつた貰物で生きて居るのであるが、今日も亦例の如くに、いきなり私にねだりついた。丁度今、牝牛を飼ふ爲めに特別の助けを願はねばならなかつた所だつたのださうである。

『彼奴がうちのものや家まで私と姥とを食つて居るんで御座いますよ。まあ入つて見てやつて下さいまし』

『うむ、そしてお婆さんはどうだね』

『姥はどうかッて貴方……くッついて居ますよ……』

私はまたやつて來て見やうと言つた、併しそれはその牝牛についてよりも年寄の婆さんを見たいからであつた。私はまた兵士の妻の住家を尋ねた、後家は一軒おいた隣の家を指して、そして急いで、彼等は貧乏であることはあるが併し弟が『恐ろしい飲み助なんですよ』とつけ加へた。

彼女から教はつた通りに私は一軒おいた隣の家へ行つた。

吾々の村々に於ける一般の貧民小屋と同じく此所も亦實に悲慘なものであつた。私はしばらくは斯くの如く頽廢した小屋を見た事がなかつた。たゞに屋根ばかりではない、壁までも撓むで、窓は傾いて居た。

内側もまた外側よりは善くはなかつた。煉瓦造りの窯は暗い塵だらけの小さ

い小屋の三分の一を占めて居て、而も驚いた事には人で一杯になつて居た。私はかの兵士の妻のみが子供と共に住むで居るのであらうと思つて居たのであるが、來て見ると中々それどころではなく、妹嫁（子供をつれた若い女の）も居れば姑も居た。兵士の妻は私を訪うて丁度歸つて來たところで寢暖爐の上で温まつて居た、彼女が其所から降りてくる間に彼女の姑は彼等の生活について私に語り始めた。最初彼女の二人の息子は一緒に住むで居た、そして二人とも自分で稼いで居た。

『ですがどうして今時みんなが一緒に居られませう、みんな別れ〳〵で御座います』とおしやべりの姥さんは言つた『嫁同志が口喧嘩をおつ始めましたものですから兄弟が別家したんですが、さうするとさ貴方、暮しの方は益々こまつて來ますし、それに私共の持つて居る土地と云つたら極少しなんですから到底も

やつて行けませんので、やつとまあ、日傭働きをして暮らして居ました所へ、今度はまた肝心のピーターが兵隊にとられてしまつたんで御座います。それであの嫁は彼麼に子供をつれて何處へ賴つて行くと云ふ譯にも參りませんものですから、今は私共と一緒に住むで居るんで御座いますが、私達はもとより、彼女が大勢の子供を皆養ひきる事は出來ませんし、さればと云つて何とも仕樣がないので實に困つて居るので御座います。世間ではピーターを戻して貰へるだらうと云ふ事で御座いますがさ』

兵士の妻は寢暖爐から降りて來て、彼女の夫をとり返してくれるやうにと私に嘆願した、私はそれは利底不可能である事を彼女に告げた、そして彼女の夫は彼の妻子を支へる爲めに何程の財産を兄の手元に殘して置いたかと尋ねて見たが財産と云ふものは少しもなかつた。彼は彼女や子供を養つて行かんが爲め

に彼の兄弟に土地を渡してしまつたので、羊が三頭殘つたきりであつたが、その中二頭は彼女の夫が出立の費用の爲めに賣つてしまつて、今はたゞ一疋の羊と二羽の家禽の外に數疋の老兎が殘つて居るばかりだと彼女は言つた、それが彼女の持つて居る凡てであつた。姑は彼女の言を保證した。

私は兵士の妻に彼女が何處から來たかを尋ねた。彼女はセルギエフスコーから來たのである、セルギエフスコーは、そこから三十哩かそこへらの處にある大きな富裕な村である、私は彼の兩親が生きて居るかどうかを尋ねた、彼女は言つた、兩親は生きて居る、そして幸福に住んで居ると。

『何故、お前さんはそこへ行かないんだね』と私は問うた、

『私もさう思つたんですが、併しお父ッあん等だつて私共四人もおいて呉れるか何うかと思ひますので』

『多分置いてくれるだらう、何故手紙をやつて見ないんだね、俺から書いてやらうか』

妻はそれに同意した。それで私は彼女の兩親の住所を書き認めた。

私が彼女と語つて居る間に一番上の子供——腹のふくれた娘の兒——がやつて來て彼女の着物の袖を引いて、多分食物だらう何かねだり始めた。女はそれには頓着せずに話しをつゞけて居たが子供はまた袖を引いて何かぶつ〳〵と呟いた。

『しかたがないねえ、ほんとに此の娘(こ)は』と女は叫むで腕を振り上げて子供の頭を打つた、娘の兒は大きな聲を放つて泣き叫んだ。

用がすんだので私はその小屋を辭して、また後家の家へ歸つて行つた。

後家は家の外に出て私を待つて居た、そしてまた入つて彼女の牝牛を見てく

れと言つた、私は中に入つて行つた。牝牛は實際その通路のところに居た、後家は私にそれを見よと言つた、誰もそれを見ても面白くも何ともないと云ふ事を想像することが出來ない程、この後家は牝牛に夢中になつて居るのだなと思ひながら私は言ふがまゝにその牛を見た。

牝牛を見て私は内側に入つて行つた、そして『お婆さんは何處に居るね』と問うた。

『お姥さんは』その牛を見た後にも尙私が婆さんに興味を持ち得ることを驚いた樣に後家は繰返した、『姥は寢暖爐の上ぢやありませんか、何處へ行かれませうに』

私は寢暖爐の上に登つて行つて婆さんに挨拶をした。

『おゝ〳〵』しわがれたかよわい聲が答へた。『どなた樣で』

私は自分を婆さんに告げて、そして近頃は何うかと尋ねた。

『もう此麽になつちや何うしませうに』

『苦しいかね』

『痛くつて〳〵、おゝ〳〵』

『お醫者さんが俺と一緒に來て居るんだが呼むで來てあげやうか』

『お醫者さん……おゝ……おゝ、どうして俺はお醫者さんを……俺のお醫者は天に……おゝ……おゝ』

『年をとつて居ますからねえ』と後家は言つた。

『俺よりは若いさ』

『若いどころですか、何うして。ずつと上ですよ、何でも九十だとか言ふ事ですよ』と後家は言つた。

『髪の毛が拔けましてねえ、此の間私や、皆かつてやつたんですよ』
『何故刈つたんだね』
『何故つて貴方、もう殆んど拔けてしまつて居るむですもの、それでいつその事私は刈つてやつたんです』
『おゝ……おゝ』婆さんは悶いた、『おゝ……神樣は俺をお忘れにならしやつたのか、一向俺の靈魂を取つて下さらないし、神樣がとつて下さらにや自分で死ぬと云ふ事も出來んし、おゝ……おゝ、これや俺の罪のために違いない……咽がかわいて〳〵、死ぬ前にたつた一口お茶が飲めたら……おゝ……おゝ』
醫士は小屋の中に入つて來た、そして私は左樣ならを言つて街道に出た。
私達は橇に乘つて一昨日迎へによこした、醫士の最後の患者を見舞はんが爲

めに小さい隣村へ行つた。私も亦、小屋の中に入つて行つた、室は小さかつたが奇麗であつた、その中央に一の搖籃が天井から、ぶらさがつて居て、一人の女がそれを切りに搖ぶつて居た、食卓のところには八つ位の娘の兒が座つて居たが、驚いた眼付きで私達を眺めた。
『何處に居るかね』と醫士は尋ねた。
『寢暖爐の上に』女は搖籃を動かす手を休めないで答へた。
醫士は攀ぢ登つて行つて患者の上の方に身体をおほひかぶせて何かした。
私は近く寄り添うて行つて病人の容態を尋ねた。
醫士は何とも答へなかつた。私も亦攀ぢ登つて行つて暗闇の中を通して見つめて居ると、段々と寢暖爐の上に居るその人の蓬々と生へた頭を見わける事が出來るやうになつた。重くるしい息苦しい空氣が仰向きになつて寢て居る病人

を取り圍んで居た。醫士は病人の右の手をとつて脈を見て居た。

『甚くわるいですか』と私は訊ねた。

私には答へないで、醫士は女の方を向いて、『ランプに光を燃しなさい』と言つた。

女は娘つ兒を呼んで搖籃を搖れと命じた。そして自分は立つてランプを燃して醫士に手渡しした、私は彼の邪魔にならない邊まで下りた。彼はランプをとつてまた患者を見た。

小娘は私達を見つめて居た爲に搖籃を十分に搖ぶらなかつたので、赤ん坊は唯聲を立てゝ哀れつぽく泣き始めた。母親はランプを醫士に渡して、慳貪に小娘を衝きやつて自分でまた搖籃を振り動した。

私は醫士のところへ歸つて再び患者がどうかと尋ねた。醫士は尙も患者を診

て居たが何か一言細い聲で言つた。

私はそれをきゝとれなかつたので、また聞き直した。『死の苦(デッスペアゴニー)』彼は故意と他國語を用ひてかう繰返した、そして下りて來てランプをテーブルの上に置いた。

赤ん坊は悲し相なそして腹立たしさうな聲で泣いて中々泣きやまなかつた。

『何うしたんですか、死にましたか』恰も醫士の用ひた外國語が解つたかの如くに女は尋ねた。

『まだ。併しもう望みはない』と彼は答へた。

『それぢや坊さんを呼びにやらにやならん』女は泣き叫ぶ赤ん坊を益々甚くもすぶりながら佛頂面をしてかう言つた。

『内の人が居さへすれば……だが今は誰をやらうつたつて、皆、山へ薪をとりに行つて居るし』

『僕にはもうこれより以上手のつくし様がない』と醫士は言つた、そして私達はそこを立ち去つた。

私は後に、その女は或人を見つけて坊さんを呼びに行つて貰らつたので、坊さんは死んで行く人に辛ふじて聖饗式を行ふに間に合ふ位にやつて來たときいた。

私達は共に同じ感じを經驗しながら默つて家に歸つた。

『一體あれは何うしたんです』と私は遂に醫士に尋ねた。

『肺の炎衝を起したのですが此處に早くやられやうとは思ひませんでした。あの身體は中々丈夫に出來て居たんですが何うも條件が致命的だつたんです、何しろ百五度の體熱で居て、やつと二十度の温度しかない戸外に出て行つて座つて居たんですからなあ』

私達はまた默つて長い間橇を驅つた。

『床や枕が見えない樣でしたね』と私は言つた。

『何にも』醫士は答へた。そして私が何を考へて居るかを明に知つて居る樣に、彼は續けて言つた。

『昨日私は赤ん坊を生んだ或女を見に、クラウトーへ行きましたがね、産婦を十分に診やうとするには是非とも身體を十分に延して寢ころばさなければならないんですが、その小家中に、さうすることの出來る塲所がないんですからねえ』

私達はまた默つてしまつた。そして多分兩人ともに同じ考をしたのであらう。

私達は沈默の中に家に着いた。玄關のところには鞍を置いた美しい馬車馬が二頭立つて居た。奇麗な別當が羊の毛皮の上着を着て厚い毛の帽子を被つて居た

それは彼の所有地から驅つて來た私の悴の馬車であつた。

＊　＊　＊　＊

そして今はまた私達は十人の爲めに供へられた晝饗の食卓に着いて居る。その中の一つは空席である。それは私の小さい孫娘の席であるが、彼女は今日は少し身體の工合が惡るいと云ふので、乳母と共に、特別に衛生的に調理せられた食事を――牛茶と紗麪――自分の室でとつて居るのである。

私達の晝饗は四種の食物と二種の葡萄酒とから成る贅澤な食事で、食卓には價高き花を飾り、そして二人の給仕に侍づかれて、そして、以下の樣な談話がとり交はされて居るのである。

『この奇麗な薔薇は何處から來たの』と私の息子は訊ねた。

それは自分の名を明さない或る婦人がペテルスブルグから贈つて來たのだと私の妻は告げた。

『こんな薔薇は一つで三シリングもするだらう』と私の息子は言つて、或る演奏會や演劇ではこんな薔薇が演奏者に向つて、舞臺を埋めてしまうまで降り注がれる事を述べた。そして談しはやがて音樂の事に及んで、遂には音樂の善良なる判斷者にして恩人なる或人の事に及んだ。

『此頃は何うだらうねえ、あの人は』

『あの人はどうも何時も身體が弱い。また、イタリーへ行くのらしい、何時でも冬は彼處で過すんだが不思議にあそこでは健康が快復する』

『併しその旅行は隨分長たらしくつて堪へられないでせう』

『いやどうして、急行に乘れば三十九時間で行けますよ』

『矢つ張り鈍いぢやありませんか』

『まあ暫らくお待ちなさい。やがては飛んで行けますよ』

第三日　租　税

普通の來訪者又は請願者の外に、今日は或る特別な人々がやつて來た。第一には子なしで極貧の中に日を送つて居る老農夫である。次には子澤山の貧乏女である。第三は多分富裕な百姓である。

三人とも私の村の者で、皆、同じ用件についてやつて來たのである。それは租税が新年前に徵集せられるので老農夫の湯缸や女の唯つた一疋の羊や、そして富裕な百姓の牝牛などが租税の不納の爲めの差押物として書き入れられてしまつたので、それを抗辨して呉れるか、助けてくれるか、或はその何れをもして呉れる樣にと私に頼みに來たのである。

最初に語つたのは背の高い、立派な、可なり年のとつて居る百姓であつた。

彼の語る所によると、村長がやつて來て牝牛を書きとめ、そして廿七ルーブルを拂へと言つた。抑もこの徵税は、百姓の考へるところに依ると、穀物貯蓄資金の爲めであつて、何も今時になつて集むべき性質のものではないのである。私はそれについて何も知るところがないので、郡役所に行つて尋ねた上で納税が延期せられ得るものかどうかを知らしてやると言つた。

次に語つたのは湯缸の差押に逢つた老人であつた。身體の小さい、瘠せこけてか弱さうな、裝のみすぼらしい彼は、彼等役人達がやつて來て彼の湯缸をとり、彼が未だ且つて儲けた事もないまた今後とても決して儲けることの出來ない三ルーブル七十コペックスも納めよと言つた事を身に泌む哀れさと當惑とを以つて述べ立てた。

私は彼にそれは何の爲めの租税であるかを訊ねた。

『何でも縣税の何かでせうよ……俺等にはそんな事は解りつこはありませんよ。何うして俺や姥どもが此麽に大した金を儲けられるもんですか、此麽に困つて暮して居るんですもの……何てえ法律で御座いませう。何うか年とつた俺等を哀れと思つて助けて下さいましな旦那』

私は彼に、究べて見た上で、私の能ふ限りは盡して見やうと約束し、そして女の方に振り向いた。それは瘠せ衰へた女で、私は以前から彼女を知つて居たまた彼女の夫が飲んだくれで彼女は五人の子供を持つて居る事も知つて居た。

『役場の人達ちは私の家の羊をとり上げてしまひました。私の所へやつて來て云ふんですよ『お金を拂へ』と、『内の人は働きに出て居ますから』と言ひましてもやつぱり『拂へ』と言ふんです、けれども私が何うして拂へるものですか羊を一疋持つて居るつきりなんですもの、そして奴等はその羊を持つて行かう

として居るんで御座います』と言つて女は泣き出した。

私は究べた上で出來る事なら助けてやらうと約束した。そして先づ第一に私は税は何の爲めか、何故か樣に嚴しく取立てるのかを尋ねんが爲めに村長のところへやつて行つた。道で二人の嘆願者は私をひき止めた。彼等の夫達は働きに出て居つた。一人の女は手織の麻の晒布を二ルーブルに買つてくれと言つた。

『私は丹青してやつと育て上げて、卵を賣つて生活して居つた鷄をとられたんですもの。買つてお呉んなさいまし、そりやいゝ晒布で御座いますよ、こんなに困らなけりや三ルーブルにでも放さないんですけどもねえ』

宅へ歸つてよく考へて見やう……多分税の方を善い工合に處分することが出來るだらうと言つて女を返した。

村長の家に着くまへに或女が私に逢ひに來た。その女は私の以前の生徒で、

黒眼がちの眼をした、併し今はもう姥さんのォルガと云ふ女である。彼女も同じ境遇にあつた。牝羊をとられたのである。

私は村長のところに着いた。彼はむぢやむぢやした鬚の生へた頑丈な賢しさうな百性であつた。彼は私に逢はんが爲めに往來へ出て來た。私は彼に問うた。何の税を徴集して居るのか、また何故かやうに嚴しく取り立てるのかと。彼は答へた。今年中に凡ての滞納金をとりたてる樣にと云ふ嚴命を受けたからだと。

『君は湯缸や家畜をまで沒收する樣に命ぜられたかね』

『勿論です』村長は肩を聳びやかしながら答へた。

『税は納めにやなりませんや……まあ譬へはアバカウモーフを御覽なさいませ』と穀物貯蓄資金の納付のために牝牛をとられた富裕な百姓に關して彼は言つた。『彼の悴は isyóstchik で御座いますよ。奴等は馬の三頭も持ちながら拂はれないと云ふ譯があるもんですか。それだのに奴は何時でも逃げやう逃げやうとするんです』

『さう。彼れの場合ではさうだとしても實際貧乏な者は何うだね』と言つて、私は湯缸をとられた老人を名ざした。

『さうです、奴等は實際貧乏です、拂はうたつて何にもありやしませんです。しかしその邊の事はもう考へに考へ拔いてあるんですから何うにも仕方がないんです。』

私は羊をとられた女を名指した。村長もその女には氣の毒がつた、併し、恰もそれは自分を辨解するかの如くに、命令に從はなければならないからと言つた。

私は彼に何年村長をして居るかまた何れ丈けの報酬をもらつて居るかを尋ね

た。

『何許とつて居るかですつて』と私の尋ねた問には答へないで、私の心の中に占めて居る、彼の推量したところの問、即ち何故彼れがかうした職業に與つて居るかと云ふ問に答へて『私は辭職したいと思つて居るので御座います。三十ルーブル貰つて居るんですが、その代り惡るい事でも無理にやらされるんで』

『そして實際湯缸や羊や家禽を沒取するむかね』と私は問うた。

『えゝさうですとも、私達はそれをとらなけりやならぬ義務があるんです、郡役所の方ではそれを賣る樣な方法をとるでせうよ』

『えゝそいつを賣るのかね』

『人民は何うにかして拂ふ樣に骨折るでせうよ』

私は羊の事でやつて來た女のところに行つた。女の小屋は小さかつた。そし

て外側の通路に當つて帝國豫算案を支ふる爲めにとらるゝところの、女の只だ一つの羊が居た。貧乏と過勞とでやつれ果てた神經質な女は私を見て百彼女のよくやる樣に、躍起となつて早口に語り初めた。

『まあ見てお呉んなさい。こんな暮し方なんですもの。あの人達ちは私のたつた一つ殘つた羊を取つて行かうとして居るんです、私や子供等は生くるか死ぬかのくらしで御座いますのに』女は子供の寢て居る寢棚と寢暖爐の上を指した、

『おりて來な……怖ぢなくつていゝよ……まあ見てやつて下さいまし、私は何うして自分とこの裸な子供とを養つて行かれませうか』

子供は殆んど文字通りに裸であつた。破れ果てたシャツの外、何も着て居ないで——ヅボンさへ——寢暖爐から下りて來て母親をとりまいた。

同じ日に私は郡役所に行つて、私には耳新らしい、この嚴酷な徵稅の仕方に

ついて尋ねて見た。郡長は居なかつたが直ぐ歸つてくると云ふ事であつた。役所の中にも彼に逢はんとして居る多くの人が格子の後に立つて居た。

私は彼等の名をきき、何の爲めにやつて來たのかと尋ねた。二人は遠方へ働きに行く爲めに旅券を下げて貰らはうとして旅券を買ふ金を用意して來て居た一人は彼が廿三年の間住み且つ働いて居た、そして彼を養子にした叔父の所有であつた家を、今や叔父も叔母も死んでしまつたので、叔父の孫娘にとられてはならぬとて訴へたのを棄却せられたのだが、その裁判の判決書の明細を寫さうとして來たのであつた。孫娘はその嫡系であるのとまた十月九日の法令に於ける便利とに着け込んで、彼女はこの嘆願者の住むで居る土地と家屋との所有權を賣らうとして居るのである。彼の嘆願は拒まれた、併し彼はこれが法律であると云ふ事を信ずることが出來なかつたので、更に上院に控訴しやうとして

居た――その實それは何院であるかをさへ知らないのだが。私は左樣な法律のある事を說明した、するとそれは其處に居た凡ての人の間に、はては當惑と不安とにまで高まつた非難を惹起せしむるに至つた。

この人と話し終るか終らない中に、荒々しい嚴しい顏をした背の高い百姓が彼の事件について私の說明をきかしてくれと言つて來た。彼のやつて來た用件はかうである、彼及彼の村民は何時からか覺えて居ない程以前から、彼等の土地より鐵鑛を採掘して居つた。ところが近頃になつてその採掘の禁止令が發布せられた、『自分の土地で掘つてならないと云ふ法律は何てえ法律でせう。俺等はたゞ鐵を採つて生活して居るんで御座います、それだのにもう一月餘もしらべられて居て、まだ何とも結着がつかないんです。俺等にやちつとも解りませんが何しろ奴等は俺等を全く倒してしまふでせうよ。そしてそれがこの事件の

結着でせうよ』

私はこの人に何等の慰めの言葉を語る事が出來なかつた。そして現に私の村に行はれて居る如き滯納税の嚴しい取り立てについて尋ねんが爲めに丁度今歸つて來た郡長の方に振り向いた。一體何の法令に基いてこの税が徵集せらるゝのかと私はきいた。郡長は今彼等が農民からとり立てゝ居る税には七つの種類がある、それは(一)皇室税(二)縣税(三)保險税(四)前期穀物貯蓄資金の徵集(五)同種物品にてとりたてる代りの新穀物貯蓄資金(六)商業税及地方税(七)村税、だと云つた。

郡長も亦、丁度村長が言つた樣に上官の命令故に特別に嚴重に取りたてゝ居るのたと云つた。彼は貧民から税をとり立てるのは中々容易の事ではないとは言つたが村長程には農民に對する同情を表さなかつた。彼は敢て官憲の非難をしなかつたのみならず、彼の職務の必要とかゝる行動に關與する事の正義とに

ついて毫も疑を挿まなかつた。

『矢つぱり……奬勵することは出來ない』

やがて私はまた或るチエームスキー*、ナツチャールニクと語る機會を得た。彼は多分未だかつて見たことのないだらう貧になやんで居る農民の世智辛い運命に對しては殆んど何等の同情をも表さなかつたと同時に、彼の行爲の道德的にして法律に適つて居ると云ふ事について殆んど疑ひを容れなかつた。たゞ彼は私との談話の中に、概して少しもかゝる職務につかない方が愉快であると云ふ丈は許容した。併しもし他人が彼の職に就いたならば更に惡事を働くに極つて居るから彼は餘程有用な才であると自信して居た。

* A Zemsky notchalnik. は地方廳に置かれたる月給を受け居る官吏にして偶々鄉紳士より擇拔せらるゝ事あり而して莫大なる權威を賦與せらる。

『そしてこの國に住むで居る人が一度位、何でチエームスキー、ナッチャールニク位の少額の月給をとつては善くないのか』と言つた。

そして最後に首相や、酒類の取引きに忙殺されたる人達や、人民に互に相殺し合ふ事を敎へて居る人達ちや、そして人民を罪して追放し牢獄に投じ、科料に處し、或は絞首臺に上さしむる人達――即ち大臣及屬官の凡ては皆、乞食から奪つた湯缸や羊や晒布や牝牛を以つて、人民を害するところの酒を製造し、人を殺す爲めに武器を製造し、的標や牢獄を建て、そして尙その外に、彼等及その屬官が、化粧室を設備し、妻君に美服を纏はし、而して野卑なる恩知らず奴等の幸福の爲めに、困難なる働きを終つた後の骨休めとして旅行や娛樂をとらんが爲めに要する所の月給を拂ふ事をもつて最善なる用途に充て得たと確信して居るのである。

結語、夢

二三日前の夜のこと、私は夢を見た。それはその翌日になつて『今日は非常に大切な日だが一體何うした譯だらう』と幾回となく自問した程、意義のある夢であつた。そして私はその時その特別に大切な事は私がその夢の中に見た事、と言ふよりは寧ろ聽いた事であると云ふ事が解つた。

私を非常に感動せしめたものは、度々私の夢で現はれて來る二人の人の組合せからなる或人の演說であつた。二人の人とは、禿頭の兩側に灰色の捲毛のぶら下つて居る、今は故人となつた私の舊友ウラジミール・オーロフと、私の兄と同居して居た筆耕とである。

その演說は富める婦人と、彼女を訪問して來た地主との間の會話から喚起さ

れたのであつた。婦人は隣州に於て百姓が地主の家や、百年も立つて居る櫻の樹の被ひにしてあつた多くの小屋や、そして公爵夫人の梨の木等を燒いてしまつた事を仔細に話すと、訪ねて來た地主はまた地主で、百姓が彼の森の樫樹を伐り倒したのみならず、枯草の鴉を車に積んで持ち逃げした事を話した。

『放火だつて掠奪だつて今日ではもう罪惡だとは見られて居ないのですねえ、人民の不道德は實に甚いです、皆、盜棒になつてしまつたのですからねえ』と或者が言つた。

そして此等の言葉に答へて二人の組合せによつて成つたその人は下の如く語つた。

『百姓は樫樹や枯草を盜みました、そして盜棒であります。最も不道德な階級であります』彼は別に何人にと云ふあてもなく語り初めた。『まあ御覽なさいか

のコーカサスの酋長はアオールス人を遊擊してその住民の馬を悉く持ち去る事を常として居ます、然るに彼等住民の中のある者はその酋長の牧場から、掠奪された彼等の馬の一つをでも取り返す方法を發見したとして御覽なさい。然らばその人は、盜まれた多くの馬の中で只の一疋をとり返したが故に盜棒と云はれませうか。而してそれは百姓が貴君方から盜み去つたと云ふ樫樹や草や枯草やその他種々の者に就いても同じ事ではありますまいか。世界は神のものであります、而してもしも百姓がこの掠奪されたる共有地に生じた者を取つたと致しましても、それは盜んだのではありません只だ彼等から盜まれたものの極少部分を取り歸したに過ぎないのであります。――百姓は貴君方が、土地は地主の財產だと思惟して居る事を知つて居ます、そしてそれ故に、百姓が其處から生ずるものを回復するのを貴君方が盜棒だと思惟

し給ふ事を知つて居ます、併し貴君方はそれが眞理でないと云ふ事を知らねばなりません、土地は決して或人の財産ではありませんでした、またあり得ないのであります。もしも他の者が少しの土地も持つて居ないのにも拘らず、自分丈けは必要以上に土地を持つて居るものがありますならばその過剰なる土地を有つて居るものは土地を有つて居るのではありません、只だ人を有つて居るのであります。而して人は決して他人の財産となる事は出來ません。

不幸なる十二人の少年は幾本かの櫻の木の被ひを燒き、或る木を伐り倒したが故に貴君方は百姓を盜棒だと言ひます、最も不道德なる奴輩だと言ひます。

——如何にして貴君方の舌はかゝる言葉を吐き出し得るのですか。彼等は貴君方より十本の樫の木を盜みました諸君をして彼等を獄に投ぜよと言はしめる樣に。

——併しながら若しも彼等が單に貴君方の樫樹のみならずこの家の中にあるものを悉くとつたとしても、それはたゞ彼等及び彼等の兄弟によつて作られたる彼等自身のものをとつたのに過ぎません。決して諸君によつて作られたる者をとつたのではありません。樫の木を盜まれたと云ひますか、併しながら貴君方は多年に渡つて、只に彼等の樫樹のみならず實に彼等及び彼等の子供や女や老人——そは只だ神が萬人共同に與へたる土地を掠奪されたので貴君方の爲めに働かざるを得なくなつたが故に、時未だ至らざるに己に凋んでしまつたところの者です——それ等の者のの生命をすら盜んで居るのであります。

——たゞこれ等幾百萬の人々が如何に住み來つたか、現に如何に住んで居るかまた貴君方自身が如何に住むで居るかと云ふこの一事を考へて下さい。たゞ彼等が人生の凡ての慰めを貴君方に供給し、而して貴君方は彼等から凡ての者を

——彼等自身及その家族を支え得る能力をさへ——奪つて居ると云ふ事を思つて下さい。貴君方の依つて以つて生活して居るものは——そは實にこの室に在るもの、貴君方の華麗なる町や宮殿に於けるもの、諸君方の狂氣せる、事實狂氣せる贅澤品——これらは凡て彼等によつて造られ、尙不斷に造られつゝあるのであります。

——而して彼等はこれを知つて居ます、彼等は貴君方の公園も競馬馬も自動車も宮殿も美味も美服も而して貴君方が科學及藝術と呼ぶところの凡ての汚穢と愚鈍も、凡ては皆彼等の兄弟や姉妹の生命によりて買ひとられたものである事を知つて居ます。彼等はこれを知つて居ます、また知らないですみません。然らば若しも彼等も亦貴君方と同じ人間であるとするならば貴君方に對して何んな感情を持つであらうかを想像して下さい。

或人は思ふでせう、彼等は、貴君方が彼等の上に害を加へて居る事を知つて居るが故に彼等は靈の奥底から貴君方を憎み且つ復讐を加へずんば止まないだらうと、而して貴君方は彼等の如き民は、その數に於て千萬にも達して居るのに對して貴君方の階級の人々は、ほんの五六千に過ぎない事を知つて居ます、併し彼等は何をなすでありませう……彼等は決して諸君を以つて無用にして有害なる卑劣漢とは成しません、却つて惡に報ゆるに善を以つてします、而してその苦しい生活を忍びながらも諸君がその自らの罪を自覺して生活の途を改革するに至るべき日を待ちつゝ勤勉にして合理的なる生活をつゞけて居るのであります。併し彼等がさうするに代へて諸君は何をなして居ますか、諸君はその上品なる自負的不道德の高所よりして之等の掠奪されたる卑しき人民の屈從を許容して居ます。

諸君は彼等を教化します、そして彼等の恩惠者を以つて任じます、即ち彼等の勞働によつて諸君にまで供給された手段に接木するに諸君は諸君の掠奪と叱責と矯正とを以つてします、而して更に進んでは理性のない氣荒い小兒が自分達を養つてくれる母の胸に嚙み付くが如くに彼等を害します。

――然り諸君は先づ自らを省みなければなりません。然して諸君が果して如何なるものであるか、また彼等は果して何者であるかを考へなければなりません而して眞に生きて居るものはたゞ彼等のみであつて諸君はそのドウマスを以つて、內閣を以つて、專問學校を以つて、保守黨をもつて、裁判所や軍隊を以つて、而して凡てかくの如く愚劣にして醜惡なるものを以つて人生を遊んで居るに過ぎないのみならず、諸君及他人の生命を傷害しつゝあると云ふ事を知らねばなりません。彼等人民は生きて居ます、彼等は木であります、而して諸君は

植物の上に生ずる菌であります、その發育の妨害者であります、果して然らば諸君はその自らの無意議にして彼等の如何に莊嚴であるかを知らねばなりません、而して諸君の罪を自覺して悔改めん事を努めねばなりません、如何なる代價を拂ふとも人民を解放しなければなりません……

『何と善い演說ではないか』と私は思つた『これ果して夢であり得やうか』

そしてさう思つた時私は目さめて居た。

この夢は私をして再び土地問題を考察せしむるに至らしめた。それは貧になやめる農民社會の間に住んで居る人々にとつては考へないでは居られぬ題の一つである、私はこの問題に就いて屢々書いた事あるを知つて居る、が、かの夢の感化によつて、繰言に陷る危險をも冒して私は尙今一度私の意見を發表する必要を感ずる。

土地の私有財産制に對する人民の態度が變更せられざる限りは、或者が他の者に所有されると云ふ殘酷にして兇惡なる奴隷の形式に對してもさう度々彈該し指示する事が出來ないのである。

人民は土地を財産だと言ふ。而してそれはたゞ政府が土地の私有權を認めて居るが故にさう言ふのである。併し、五十年前は政府は人類の私有權を認めて居た時があるが而も遂に時は來た。人類が私有財産であり得なくなり政府が彼等を財産と認むる事が出來なくなつた時が來た如く、やがて土地の私有財産もかくの如くになるであらう。現今に於ては政府は土地の私有權を認めて居るのみならず、權力を以つてこれを保護して居る。併し何時か政府とても此の種の財産を非認し且つ廢止するに至る時が來るであらう。政府がそれを廢止しなければならぬ日が必ず來るであらう、何となれば土地の私有權は人民の私有權——

人民奴隷制——と同樣に全く不義であるからである、たゞその相違の點は土地奴隷は間接不明瞭なるに反して人民奴隷は直接簡明なる點にある。彼の時には太郎は喜八郎の奴隷であつたに對して今は太郎は或る不知の人の奴隷であると言ふまでゞある。太郎はたしかに自己及自己の家族を養はんが爲めに土地を所有して居る人に依らねばならぬ。而して啻に土地奴隷は人民奴隷の如くに不正にして殘酷なるのみならず、奴隷の側に在りては更に生活が難澁であつて奴隷主の側に在りては更に罪が深い。何となれば人民奴隷に於ては——同情の念からでないとしても少くとも利害問題からして——所有主は彼の奴隷が貧乏の爲めに零落し又は死んでしまはない樣に氣を付けてやらねばならぬのみならず彼れの才能と了解との全部を擧げて奴隷の德性の方面をも見てやらねばならぬからである。然るに地主に至つては奴隷が如何に零落しやうが德性が頽廢しやう

がそんな事には頓着しない、何となれば、假令多くの人が死んでしまはうが仕事を奪はれてしまはうが彼は常に新らしい勞働者を見出し得ると云ふ事を知つて居るからである。

今日の新奴隷――土地奴隷――の不義と殘酷とはかくの如くに明瞭である、故に恰も人民奴隷が半世紀前に時世後れと認められた樣に、この新奴隷は今迄に、己に時世後れとして認められてあるべきだと思ひ、また人民奴隷が廢止された樣に此れも廢止されて居るべきだと考へる者もある程痛はしい難澁な狀態にある。

『併し土地財產制は廢止する事が出來ない、何となれば異なたる質の土地から生ずる利益を勞働者と非勞働者とに均一に分配すると云ふ事は不可能な事である』と言ふものがある。併しそれは眞理でない。土地の所有權を廢止するのに

土地を分配する必要がない。

恰も人民奴隷が廢止された時には解放されたる人民の分配と云ふ事か必要でなく、必要だつたのはたゞ人民奴隷を維持せる法律の廢止であつた如く、土地の所有權の廢止に於ても、土地分配の必要があるのではなく、たゞ土地の所有權を認可したる法律の廢止を必要とするである、而してまたかの人民奴隷の廢止された時には奴隷は皆各自にその欲するところの方法に從つて自分の身の處置をつけた樣に土地の所有權が廢止された時には人民は各自適當にその土地より生ずる利益を均一に分配する方法を見出すであらうそれはヘンリー、ジョージの單一稅制によつて處理されるか、或は他の方法によるか、それは吾人の知るところではない。併しながら政府が、かくの如く明に、不正にして壓制的なる土地所有權を、權力をもつて維持する事を廢める必要のある事丈けは確であ

る。さうするとこれ等の抑壓から解放されたる人民はたゞ相互の讓合によつて、萬人が均等にこの土地より生ずる利益の分配に與り得るが如き方法に土地を分配する途を見出すであらう。

たゞ多くの地主――奴隷所有者――に對して、土地財産制は奴隷の側にとつては非常な困難であり地主の側にとつては非常な罪惡であると云ふ事を了解せしむる必要がある、(人民奴隷の場合に於けるが如くに)而してそれを了解したならば次に彼等をして土地財産制――即ち土地奴隷――を認定せる法律の撤廢を政府に迫らしむる事が必要である、恰も五十年前に最も善良なる社會の人々(重に奴隷を所有せる貴族彼等自身)が彼等の地位の不義なる事を了解して、政府に對つて明に時世後れである不道德な權利を廢止する必要のあることを說明したので人民奴隷が廢止せられたる如く、土地私有――即ち土地奴隷――の權

に關しても同樣な方法をとるべきだと云ふ事が解るであらう。

併し奇怪な事には百姓奴隷の所有者、即ち土地所有者は只に彼等の地位の不義を觀破する事が出來ずして土地所有權の廢止を政府に迫らないのみならず、却て意識的にまた無意識的に色々の手段を弄して、彼等の地位の不義に向つて自らも目を閉ぢ、奴隷の眼をも閉ざしてしまう事である。

その理由はかうである。第一に五十年に於ける人民奴隷は人間が人間を奴隷にして居ると云ふ事が明白であつた故に宗教的又は道德的感情と餘り顯著に相撞着したのであつたが、土地奴隷は直接明瞭なる奴隷ではなく、寧ろ完成せる政治的及び社會的經濟制度の爲めに、奴隷にもまた特に奴隷所有者にも穩されて居るからである。第二には人民奴隷の時にはたゞ或る一つの階級のみが奴隷所有者であつたが現今に於ては最大多數の階級――土地を殆んど持つて居ない

百姓や勞働者によつて成立する――を除いては凡ての階級の人々が奴隷所有者であるからである。今日に於ては貴族も商人も官吏も製造人も教授も教師も著者も音樂家も、畫家も、富める百姓も、富豪の僕婢も澤山の賃銀を得る工匠も電機師も機械師も、彼等は凡て土地を充分に持つて居ない百性や、土地より生ずる利益を占むるところの人々の爲めにその勞力と生命をすら與へねばならぬ不熟な勞働者――そは表面上は種々雜多な原因に因つて生じたるが如く見えるが、實際に於ては土地所有者の土地の獨占と云ふ唯だ一つの原因によつて生ずる所の――を奴隷として所有して居るのである。これ等の二つの理由――即ち新奴隷は舊奴隷よりも著しく目立たざる事と、新奴隷主は舊奴隷主より數に於て遙に莫大なる事――はやがて今日の奴隷所有者が彼等の地位の殘酷にして不義なる事を認めず又その不義より彼等自身を解放しやうとはしない理由であ

る。

今日の奴隷所有者は彼等の地位の不義である事を認めず、またその不義より免れん事を欲しないばかりでなく、土地財産制が必要なる制度であり社會の秩序の爲めには缺くべからざるものであり、而して勞働階級の悲慘なる狀態は――そは彼等の見ざらんと欲しても能はざる――種々の原因より起りたるものであつて個人の土地所有權の認定より起るのではないと云ふ事を確信して居るのである。

この土地所有權及勞働者の悲慘なる狀態の原因に關するこの種の見解は歐洲基督教國の先進者たる佛、英、獨、米の諸國に於ては正しき方向を眺め得る社會の公人が殆んどないと云つてもよい位、公然と認められた事實である。

歐羅巴や亞米利加に於てはさうである。併しながら土地の私有權を拒む一千

萬の農民と廣大なる土地とを有し、また、殆んど宗教的意識よりして農民生活を顧つて居る人民を有したる我々ロシア人に向つては、勞働者の難澁に關しまた彼等の狀態を改善する手段に關して自然に顯はれ來るべき問題に對して、普通歐羅巴人の答案とは甚だ類を異にした答案が提出せられるであらうと期待せられたであらう。もしも我々ロシア人が眞實國民の地位の改善に腐心し、また、彼等の縛られたる頽廢の力から彼等を解放せうとして居るならば、これをなす手段は常識と人民の聲との兩者によつて指示せられる、而してそれは即ち土地の私有權廢止即ち土地奴隷の廢止であると云ふ事を了解すべきであると、人は思ふであらう。

併し不思議な事には勞働者階級の狀態の改革問題を以つて充ちて居るロシアの社會に於てこの唯一の自然にして單純明白なる改革手段を提出する者が少し

もない。土地問題に關する我國の百姓の見解が他の歐州各國よりは一世記も進むで居るのに拘らず吾々ロシア人は吾々の間に歐州諸國の型に倣つてドウマスや會議や內閣や裁判所やチエムストフオースや大學や巡回講話や專問學校や小學校や軍艦や潛水艇や飛行船や而してその他種々の、人民にとつては不必要でありまた甚だ緣遠い奇怪極まる多くのものを設置する事より以上の善き方法を工夫する事が決して出來ない。のみならず宗教や道德や常識や又全農民により て要求せられたるこのたゞ一つの事を爲さないのである。

これ丈けではない、土地所有權を認めずまた決して認めなかつた我等國民の運命を處置せんとするに當りて、吾人は歐羅巴を摸倣して能ふ限りの狡滑なる手段と欺疑と賭賂と而して權力を以つてすら土地財產制の概念を人民に鼓吹せん事をつとめて居る。言ひ換ふれば吾々は是等人民が多年保持し來りたる眞理—

―それは、地上に住む凡ての人が土地の同一の使用權を持たねばならぬと云ふ遲かれ早かれ何時かは慥に全人類に認めらるべきこの眞理――の自覺を奪ひ且つ破壞せんとして居る。

斯の如く彼等にとつては本來のものでない土地財產制の觀念を、人民に接木せんとする此等の努力は政府の大なる熱心と堅忍と、而して今日の奴隷所有者の意識的もしくは無意識的の自己保存の本能とによつて不斷に行はれて居る現時の奴隷所有者は、單に土地所有者たるのみならず、人民が土地を掠奪された結果としてその人民の上に權力を弄し得る所の者である。

人民を掠奪せんとする强烈な努力が行はれて居る。併しながら神に謝す、今日に至るまで凡てかくの如き努力は、たゞロシアの百姓の最も劣惡なる最少部分の上にその感化を及したに過ぎない事は明白であつて、土地を殆んど所有せ

ずして住んで居る幾百萬のロシアの勞働者は――奴隷所有者の如く壞頽せる寄生的生活ではなく彼等自主の合理にして勤勉なる勞働生活をして居る――此等の努力には降參しない。何となれば彼等にとつては土地問題の解決は今日の種々の奴隷所有者によつて考へらるゝ如く個人的利害の問題でないからである。この莫大なる農民にとつてはその問題の解決は、今日起り明日忘れられてしまう樣な互に相衝突する經濟說によつては得られない。

たゞ彼等によりて實現せられる、また常に全世界に於ける合理的人民によつて實現せらるべき唯一の眞理――即ち萬人は同胞なるが故に世界の與ふる凡ての恩惠及その他の凡ての權利に對して平等の權利、即ち土地使用の平等權と云ふこのたゞ一つの眞理の中にのみ見出し得ると信じて居るのである。

此の眞理の中に住むで居る故に莫大なる農民の一團は土地所有權に關する一

二の法律の變更や、政府の採用したる悲慘なる手段等には少しも心を留めない何となれば彼等は土地問題の解決はたゞ一つ――土地私有權及土地奴隷の廢止――であること知つて居るからである。而してこれを知るが故に彼等は遲かれ早かれ何時かは來るべき彼等の日を靜に待つて居るのである。

村の歌唱隊

霧を通しては誰も見られなかつたが、人聲と手風琴とがつひ側でゞもある樣に響いた。それは働き日の朝であつた、だから私は音樂をきいて驚いた。

『あゝ、これは新兵の暇乞だな』と私は考へた。四五日前吾々の村から採られた五人の男のことについて聞いたことがあつたのを思ひ出して。その愉快な歌に引きつけられたので、自づと私はその歌の出どころの方に向つて行つた。

私がその歌手たちに近寄つた時、歌の聲で手風琴の音も急にとまつた。歌手たちは、即ち暇乞ひをして居る少年たちは、そのうちの一人の父の家である表口が二重になつて居る小屋に入つた。戸外には女や娘や子供たちの小さな群が立つて居た。

誰々の息子たちが兵隊に行くのか、そして何で彼等が此の小屋に入つたのかをきいて居る間に、少年たちはその母や姉妹に從はれながら戸外に出て來た。みんなで五人、そのうちの四人は獨身もので、一人は既婚者であつた。私たちの村は町の近くであつた。その町で殆んど凡ての此れ等の新兵たちが働いて居た。で、彼等は、明かに彼等の最上の着物を被て、町風に裝うて居た。ビージャケッツ（一種の厚上衣）新しい帽子、深い派手な長靴。その中でも特に目だつた一人の青年があつた。彼はさう高くはない良い體格をして氣持のいゝ喜ばしさ

うな表情に富むだ顏をして居た。ちよつぴりとやつと生へかけたばかりの口鬚や頰髯があつて、輝ける鳶色の眼をもつて居た。外に出て來ると直ぐ彼はその肩にかけてあつた大きな價の高さうな手風琴をとり、そして私に頭をさげて『バアリンヤ』の樂しい調べを彈きながら歩み去つた。敏捷に指を鍵の上に走らせ、精密に時をとりながら、律動的な歩調をもつて快活に歩み去つた。

彼と並んで、太型の、立派な髮をした、これも中背の少年が歩るいて居た。彼は喜ばし氣にあちらこちらと側見をしながら、最初の歌手に調はせて、元氣に第二番目を歌つた、此の二人が他の三人の前になつて歩るいた。他の三人もいゝ裝をして居たが、その中の一人が高いと云ふことの外別に目立つたこともなかつた。

群衆と共に、私は少年たちについて行つた。彼等の歌は凡てみな愉快であつ

た、そして此の行列の行はれて居るかぎり何等悲嘆の表白をきかれなかつた。
此の少年たちが餐される次の家に來るや否やしかし、女達の悲嘆が始まつた。
彼等が何を云つて居たのかを聞くのは中々容易でなかつた。たゞちよい〳〵と
一言二言もれきこえた。『死、……父母……故里……。節ごとにその歌の音頭を
とつて居た女は深い溜息をついた、そして長くひつぱる泣聲になり、さてはヒ
ステリカルな笑ひとなつた。女たちは此の新兵達の母及び姉妹たちであつた。
これ等の骨肉のものゝ悲嘆の傍らにまた、彼等の友人たちの勤告の辭がきかれ
た。
『さあ、マトリオーナ、もういゝよ！　疲れたらう』一人の女が悲嘆にくれて
居る他の女を慰めて居るのを私はきいた。
少年たちは小屋の中に入つた。私は戸外に止つて、以前私の生徒であつたワ

シリイ・オレーホフと云ふ一人の百姓の知合と話した。彼の息子は此の五人の
うちの一人で、行進の途中第二を歌つた既婚者であつた。
『あゝ』私は曰つた、『氣の毒なことだ！』
『何としませう、氣の毒の何うのて、お上の御奉公ですから』
かくて彼は彼の家庭内の事情を私に告げた。彼には三人の息子があつた。長
男はうちに止まつて居る、二男は今暇乞ひをして居る男で三番目は（彼も此の
二番目のと一諸に働きに出て居た）此の家を支へるためによく忠實に仕送りを
して居た、だが今行かうとして居る方はあまり澤山家には送つて來なかつた。
『彼奴は町の娘を嫁にもらつたんです。ですから嫁は俺の仕事には不向きです。
彼は切り離された枝なんです、そして自分さへ支へて行けばいゝと思つて居る
んです。慥かに可哀相です、しかし仕方がありませんや』

私達が話して居る間に、少年たちは往來に出て來た。哀泣や叫喚や笑ひや嚴命やがさゝげられた。約五分間程立つて居た後、行列はまた歌を唱ひ手風琴を鳴らせながら立ち去つた。何人も此の手風琴の彈き手の精力と元氣とに驚かないでは居られなかつた。彼は時を正確にとつて足をふみ、ちよつと止まり、そしてその休止(ポーズ)の後にまたメロディを最も愉快にとつて、少しも間違へずに彈いた。而もそれは例の親切な鳶色の眼をもつてあちこちと傍見をしながら。明に彼は眞のそして偉大なる才能を音樂にもつて居た。

私は彼を眺めた。そして彼の眼が私の眼に會つた時彼は耻かしく感じた(少くともさう私には見えた)そして眉をしかめて側(わき)を向いてしまつた。そしてまた以前よりももつと元氣に歌ひはじめた。私達が第五番目の家、最後の小屋に着いて、少年たちが中に入つて行つた時、私もその中について行つた。五人と

もみな、布で被はれてある一つの卓子の周圍に座らされた。卓子の上にはパンとヲツカがあつた、私がさつき話をして居た、そして今その結婚せる息子と暇乞ひをしなければならぬ此の家の主人はヲツカを注いでそれを手廻した。少年たちは殆んど少しも飲まなかつた(多くて盃の四分の一)もしくは杯を唇にあてるばかりで返した。主婦(おかみ)はパンをきつてその片れをヲツカと共に食べる樣に廻した。

少年たちを眺めて居ると、私には不思議にそして不均合に見えたところの着物を被た一人の女がつひその側に私の座つて居た寢媛爐の上から降りて來た。彼女は流行の飾りをつけた薄みどり色の着物を(多分絹だと私は思ふ)被て、踵の高い靴を穿いて居た。彼女の美しい髪は全く近代式に大きな圓い帽子の樣に梳きつけられて居た。そして大きな指環型の金の耳環がぶらさがつて居た。彼

女の顔は悲しさうにも愉快さうにも見えなかつた、しかし怒つて居る樣に見えた。

降りて來てから彼女は、彼女の新しい靴の踵でガタ〳〵云はせながら、少年たちには眼もくれないで往來に出た。此の女につけるものは凡て――その着物と云ひ、怒つて居る樣な顔の表情として、そして何よりもその耳環――何うして彼女が此のワシリイ●オレホーフの寢暖爐の上にやつて來て居るのだかを了解する事が出來なかつた程、此の周圍とは緣遠いものであつた。私は私の側に座つて居る女にあの女は誰かときいた。

『ワシリイさんの嫁御でさあ。何でも女中だつたんですつて』がその答であつた。

主人は三度目のヲッカをすゝめはじめた、しかし少年たちはそれを辭した。

そして起つて祝福を述べ主人に禮を云つてそして出て行つた。

往來では悲嘆が一度に降り注いだ。最初に聲をあげた女は腰のまがつた非常に年とつた女であつた。彼女は特殊な哀れな聲で咳いてそして泣いた。女達はその啜り泣きをしてヨロ〳〵して居る老婆をすかしながら、その肱をとつて支へてやらねばならなかつた程。

『彼女は誰です』と私は訊いた。

『彼れの祖母でさあ。ワシリイのおッ母さんで御座いますよ、彼女は』

老婆はヒステリカルな笑ひをし出した。そして彼女を支えて居る女達の腕の中に例れた。丁度その時、行列がまたそこを立つた。そしてまた手風琴と快活な聲が調べを合せた。村の端れで村役場に乘せて行く馬車が新兵の行列に追ついた。哀泣や號泣が止むだ。手風琴彈手は益々昂奮して、頭を片方に傾け、片

方の足によりかけ、他の足でぐるりとまわつて踏みしめた。而もその間彼の指は勇放なる fioritures を彈くことを止めなかつた。そして精密に正しい時に、彼の歌の大膽な高い快活な調べ及びワシリイの息子の第二聲が再び歌はれた。老人も若人も、特に群衆を取り圍んで居た、小供たちも、そして私も彼等と共に此の歌手に驚嘆の眼を据ゑた。

『上手いな、奴は』百姓の一人が曰つた。

『「悲しい泣き聲、悲しい歌」か』と他のものが答へた。

その瞬間、私達が今見送つて居る若い人々のうちの一人が――丈の高い――長い力づよい歩みを運びながらやつて來て、手風琴を彈いた男に腰をかゞめて話し出した。

『何て立派な奴だらう』と私は考へた。『護衛隊ゆきだな』私は彼が誰であるか、

また何處の家の子であるかを知らなかつた。

『誰の息子だね、彼は、あの立派な男は』その立派な少年に指示しながら、小さい老人に私は訊ねた。

老人は帽子をとつて私に禮をした。しかし私の問ひはきこえなかつた。

『何と被仰いましたね』彼は訊ねた。

私は最初彼がわからなかつた、しかし話し出すや否や誰だかがわかつた。彼はよく働く善良な百姓であつた。だが屢々ある事の樣に、彼は不仕合せにかけては特に目立つて居た。第一に二つの馬を盗まれた、次に彼の家が燒けた、次には妻に死なれた。私は長い間プロコフェイを見なかつた。私の記憶に殘つて居る彼は中背の輝ける赤毛をした男であつた。ところが今は、彼の髪は赤くない、全く灰色になつて居る。そして小さくなつて居る。

『あゝ、プロコフェイ、お前だつたのか』と私は曰つた。『俺はあの立派な男は誰の子かと訊いて居たんだ――丁度今アレキサンダアに話しかけて居たのが』

『彼れですかい』とプロコフェイは、頭で背の高い少年を指しながら答へた。彼は頭をふつて何かブツ〳〵呟いた、しかし私にはわからなかつた。

『俺はあの少年が誰の子かと訊いて居るんだよ』私は繰返してプロコフェイの方に向いた。

彼は顔をしかめた。そして顎をふるはせた。

『彼れは私のとこんです』と彼はつぶやいて顔をそむけた。そしてそれを手で掩うて子供の樣にしく〳〵と泣いた。

そしてその時、プロコフェイによつて語られた『彼は私のとこんです』の言葉の後に至つて始めて私にはわかつた。此の忘られない霧深い朝、私の眼の前

で行はれて居ることの恐ろしさが、啻に私の心の中でわかつたのでなしに、私の全存在でわかつた、私が今まで見て來た一切の矛盾した譯のわからぬ不思議なことは急に、單純な明晰なそして恐るべき意義をとつて表はれた、私はこれを一つの興味ある光景として眺めて居たことを苦しく耻ずる樣になつた。わるい事をしたと思つて私は止まつた。そして家に歸つた。

そして、此等のことが今日、全ロシヤを通じて幾萬の人々に、斯くも殘酷にそして斯くもむざ〳〵と欺かれて居る温和な聰明なそして聖者の樣な露西亞の人民に、行はれて居り、嘗つて行はれ、これからも行はれるであらうと云ふことを考へるために。

旅人との對話

私は朝早くから外に出て居た。私の靈は光と喜びとを感じて居た。嘆美すべき朝である。太陽は今や漸つと樹々の後から現はれて、白露が木や草に輝いて居る。萬物凡て美はしく、萬人凡て愛らしい。諺に言つて居る如く「死に度くはない」程美はしい朝である。そして眞實私は死にたくはない。かくの如き美をもて取り圍まれ、かくの如き歡喜を胸に感じてこの世に今暫くを生きのびたい

と思ふ。併しそれは私の與り知る事でない。たゞ主の……。

私は村に近いた。村の取初(とつはじ)めの家の前に一人の男が私の傍に身動きもせずに靜然と立つて居た。彼はたしかに何人かをまたは何者かを待つて居た。ぢれつたさうでもなく當惑さうでもなく獨り如何に待つべきかを知つて居る働き人の如くに待つて居た。私は近よつて行つた。彼は栗のいがの樣な灰色がゝつた髮の毛の頭をした、そして單純な勞働者顏の鬚武者で頑强なそして丈夫な百姓であつた。彼は紙卷の煙草ではないが短いパイプをプカ〳〵とふかして居た。私達はお互に挨拶をとりかわした。

『アレキセー爺のところは何處かね』と私は問うた。

『さあ解りませんなあ私には、貴君。私達は旅の者ですから』

『俺は旅人』だとは言はないで『俺等は旅人』だと言ふ。ロシアの人は何時でも獨

の事は殆んどない。もし惡い事をでもして居るのならば多分「俺」と言ふのだが、さうでないと何時も「我等」一家族である。「我等」artel である。「我等」社會である。

『旅のもの？　何處から來たんだね』

『アルーガから來たんです』

私は彼の煙管を指して、『そしてお前さんは一ケ年にどれ位喫ふね、三ルーブルか、それともも一つとも要るに違ひないだらう』

『三ルーブル？　それどこぢあありますまいな』

『何故やめないのだね』

『此麼に癖になると中々廢められませんのでなあ』

『俺も、もとはやつて居たが廢してしまつた。……そして非常に氣持ちがよい——非常に自由だ』

『それやさうですとも……しかし煙草がなくちや陰氣でしてなあ』

『廢してしまうのさ。すると陰氣も何處かへ逃げてしまうよ。喫煙はよくないよ、ねえ』

『それや、善くありませんともさ』

『よくない者なら喫つちやいけないよ、第一お前さんの喫ふのを見ると他の者が——殊に若いものが——眞似をする。そして「親父達が喫ふのなら俺達も喫ふのは當然だ」等と言ふにきまつて居るんだ』

『ほんとに左樣で……』

『お前さんの子供もお前さんが喫ふのを見てまた眞似をするだらうし』

『えゝ勿論忰も……』

『ぢや、廢めるむだねえ』

『廢めたいんですが、ただ何うも煙草がなくちや陰氣でしてなあ。煙草を喫ふのは陰氣からですよあなた。みんな疲れて來ると一服やるんでさあねえ。……そしてそこが困つたところですよ。時々は陰氣で〳〵たまらない事がありますからなあ』まだるつこく彼は話した。

『それを醫すのに最もよい藥は自分の靈魂の事を考へる事だ』

彼は私をそつと見て顏の表情が全く變つた。前の柔さしい快活な生々した、そして話好きな風がなくなつてしまつて注意深く且つキッとなつて來た。

『靈魂の事を、……靈魂の事を考へろと貴老は被仰るのですか』と彼は何か尋ねた氣に私の眼を見守つた。

『さうだ。もし靈魂の事を思へばお前さんは莫迦な事は廢める樣になる』

彼の顏は感情的に輝いた。

『全くその通りです爺さん。全く。靈魂の事を思ふのは大きな事です。靈魂が重な事です。……』暫く休むで『有りがたう御座いました爺さん。全くさうです』そして彼はそのパイプを指して『これや何だ……爲めにならない塵屑だ。靈魂が肝心なんだ』彼は繰返した、『お前さまのお仰やる事は全くで御座います』

そして彼の顏は更に柔さしく更に眞面目になつた。

私は尙話を續けやうと思つて居た。併し何かの塊りが咽笛のところに込み上げて來た。(私は甚だ涙よわくなつた) そして何も話す事が出來なかつた。

喜ばしい柔らいだ感じをもつて私は彼と別れた。涙を呑みながら私はそこを立ち去つた。

さうだ、かゝる人々の中に住むで何うして喜ばないで居られやう。最も秀れたものゝ凡てを、何うしてかゝる人々に待ち望まないで居られやう。

日記より

私はまた私の友人のチェルトロコフと一緒にモスクワ縣に逗留して居る。それは何日か私達をしてヲルロフ縣の境で會はさしたのと同じ理由で彼を訪うたからであつて、一年程前に私はモスクワに來て居るのである。と云ふのはチェルトコフがトウラ縣以外なら何處に住んでもいゝと云ふ許可が下りたからだ。それで私は彼に會はんがためにその別の端まで旅をしたのである。

朝八時前に、私はおきまりの散歩をやつた。それは暑い日だつた。はじめに私は固い粘土道に沿うて行つて、蒲がもうはじけて、種が散りさうになつて居るアカシヤの藪を通りぬけた。それからまだ生々として居る可愛らしい麥花を冠けた黄ろいライ麥の畠を行き過ぎて、すつかり犁いてしまつて居る黑い休耕地の中へ來た。右手の方に粗末な百姓靴を穿いて居る一人の百姓爺がツハ（百姓の用ふる原始的な鋤）を把り、小さな痩せこけた馬をつかつて居た。私は此の爺の怒鳴りつける聲をきいた。『ハイッ、シイッー』そして時々、『これッ、畜生！』そしてまた『ハイ、シッ、畜生奴』私は彼と話して見たくなつた。しかし畔道を通つて居る間、彼は畠の向ふの端に居た。そこで私は通り過ぎた。

先の方に今一人の犁男が居た。多分此男とは、彼が此の畔道に來るまでは逢ふことが出來るだらう。そして逢つたら、また、機會さへあつたら彼と何か話

さう、そして丁度彼が道のところへ來たとき私達は逢つた。

彼は大きな芦毛の馬につけた普通の犂で鋤いて居た。彼は小さつぱりした着物を着、善い靴を穿き、體格も中々見上げたものだつた。快活に彼は、私の『御精だねえ』の挨拶に答へた。

『その鋤はソハよりいゝだらうねえ』

『えゝ、よう御座んすとも……ずつと樂でさあ』

『お前さんはそれを餘程以前から用つて居るかね』

『そんなに長いこたあありません——すんでのこと盗まれるところでした』

『取りもどしたんだね』

『えゝ、村のものがとつて居たんです』

『で、お前さんはそれを訴へたかね』

『えゝ、訴へましたとも』

『しかしその犂を取り戻したんなら何で訴へたりなんかするんだね』

『何故て、あなた、盗棒ですもの』

『だがね、その男は牢屋に入つて、そしてもつと惡るい事を覺えて來るぢやないか』

彼は私を凝乎と注意深く眺めた。明に此の彼にとつて新しい意見に同意するのでもなく反對するのでもなく。

彼は生々とした健な悧巧さうな顔をして居た。その顔には顎と上唇にやつと髯が生へかゝつて居て、智的な灰色の眼をもつて居た。

彼は犂を置いた。疑ひもなく彼は一休みして話したさうであつた。私は犂の柄を把つた。そして汗ばむだ能く肥えたそして非常によく成長した牡馬に觸れ

て見た。馬は首環にその身體の重みを壓しつけた。私は五六歩あるいた。しかし私は犂を使はなかつた。鋤は畦からとび出した。で私は馬をとゞめた。

『あなたには出來ませんや』

『俺はほんの畦道をこはした樣なものだ』

『よう御座んすよ、――私がなほします』

彼は私がしくじつた部分を犂くために馬を還した。しかしつゞけて犂かなかつた。

『日中で暑いですね。……藪の下に行つて座らうぢやありませんか』と彼は畑の向ふにある小さな森を指しながら云つた。

私達は若い白樺の影に行つた。彼は地の上に座つた。私は彼の前に立ち止つた。

『何村から來たんだね、お前さんは』

『ボトウイニノから』

『そこは遠いかね』

『あそこです。あの小山の上にピカついて居る』と彼は指しながら云つた。

『何故お前さんは宅からそんなに遠いところを耕して居るんだね』

『これは私の土地ぢやないんです。この土地の百姓のものなんです。私は傭はれて來たんです』

『此の夏中傭はれたんかね』

『いゝえ――此の土地を二度犂いて、一通り種を蒔いたらいゝんです』

『その百姓は澤山の土地をもつて居るかね』

『えゝ、十五ブッセル位の種を蒔きます』

『さうかねえ。そしてその馬はお前さんのかね。いゝ馬なのかね』
『えゝ、さう惡るい馬ぢやありません』と彼は靜かな誇をもつて答へた。
その馬は實際、骨格と云ひ、大きさと云ひ型と云ひ、百姓なんかに滅多に有つて居ない種類のものであつた。
『お前さんは何處かよそでも使はれたことがあるだらう。そして車を曳くことも』
『いゝえ、私は宅に居ます。私は戸主なんです』
『何だつて？　そんなに若くて？』
『えゝ、私は七つの時お父ッあんに死なれたんです。私の弟はモスクワの工場で働いて居ます。最初は妹が助けて呉れて居ましたが彼女も工場に出て居ます。十四の時から私は全く一人の助け手もなく、自分で何もかも儲けねばならなか

つたんです』彼は彼の威嚴をゆつたりと感じながら曰つた。
『お前さんは結婚したかね』
『まだです』
『ぢや、誰が家のことをするんだね』
『誰つて、お母さんです』
『お前さんは牝牛をもつて居るだらうね』
『えゝ、二つ』
『えゝ、ほんとかね……そして幾つだね、お前さんは』私は訊いた。
『十八です』と彼は答へた。そんなに若い男がそんなにうまくやつて行ける云ふことを見るのが私の興味をひいたことを了解して、微かな笑ひをうかべながら。これはたしかに彼を喜ばした。

『まだ若いんだねえ』と私は曰つた。『そしてお前さんは兵隊になるかね』
『勿論……行きますさ』人々が老年や死やその他當然避くべからざる者である
が故に論議する必要のないものに就いて語ると同じ靜乎な表情をもつて彼は曰
つた。
百姓と話しをする時に必ず起る樣に、私達の話しは自然と土地のことに及ん
だ。そして彼は彼の生活上のことを述べて、十分の土地をもつて居ないので、
時には馬を持出しで、時には馬なしで、賃働きをしなければ暮しては行けない
と云つて。しかし彼はこれを愉快な嬉しさうな、そして誇り顏な自己滿足をも
つて語つた、そして再びまた、彼が十四の時に一人ぼつちにされて一家の主人
となり、自分で一切の事を儲け出したことを繰返して云つた。
『そしてお前さんはヲツカを飲むかね』

『彼はたしかに飲むとは云ひたくなかつた、しかしまた嘘を云ひたくもなかつ
た。
『飲みます』小聲でそして肩をそびやかしながら、彼は曰つた。
『お前さんは讀み書きが出來るかね』
『出來ますとも』
『強い飲みものゝ事を書いた本を讀んだことはないかね』
『いゝえ、讀みません』
『でも、少しも飲まない方がよかないかね』
『勿論です。まあろくな事はそれから出て來はしませんな』
『ぢや何故やめないんだね』
彼は默つて居た。たしかによく了解つて、考へながら。

『やめられるよ。』私は云つた。『そしてやめたらどんなにいゝ事だらう……一昨日私はイウイノに行つたがね……そのうちの或る家に行くと主人が出て來て、私の名をよびながら挨拶をしたんだ。私達が會つてからもう十二年になる。その四人はクウジンと云ふんだ——知つて居るかねお前さんは』

『知つて居ますとも。セルゲイ・テイモーフイウイッチのことでせう』

私は彼に十二年前にクウジンと禁酒會を組織したこと、クウジンが酒のみであつたが全くやめてしまつたこと、そして今彼は此の汚らはしい習慣から免れたことを非常に喜んで居ると云ふこと、そして實際彼は、家もあり凡ての事をよく整理して暮して居る、しかし若し禁酒しなかつたなら此等のうちの一つをも持たないだらうと云ふことはわかりきつて居ると云ふことなどを話した。

『ほんとにさうです』

大正六年二月二十日印刷
大正六年二月廿三日發行

【定價金參拾錢】

一般人叢書
第五篇
奥付

不許複製

譯者　加藤一夫

發行者　東京市麹町區平河町五丁目三十六番地　河本龜之助

印刷者　東京市麹町區隼町二十番地　河本俊三

印刷所　東京市麹町區麹町二丁目九番地　洛陽堂印刷所

發行所　東京市麹町區平河町五丁目　洛陽堂
電話番町四二五八番
振替東京二〇九一四

トルストイ原著　塚本　弘譯

トルストイ民話集

四六版布製美裝箱入
定價壹圓貳拾錢
送料六錢

トルストイ翁に學ぶのに翁の論文や小說からするものは譬へば翁を訪ぬるに玄關からする如きもので、其所に出て來る翁の姿は如何にも嚴正で其の言ふ所は餘りに高遠である、翁の民話から翁の思想人格を覗ふものは譬へば露臺の夕明りの中で茶談に耽る翁に侍する如きもので、不用意の間却つて翁の眞面目を捕ふる事が出來る今や西洋的文明の一轉期に際會し、東洋の偉人トルストイ翁の思想に參ぜんとするもの日に多きを加ふ、翁のより端的なる一面を知るによき此好著を大方の士人に勸む。譯者は淳朴なる翁の一信者である。

發行所　東京市麹町區平河町五丁目三六
振替口座東京二〇九一四番　洛陽堂

東京帝國大學醫科大學教授　醫學博士永井潛先生著

生命論

（五版出來）

改版
增補
內容一新

菊判六百頁餘挿畫四十
九枚純白布製天金箱入
價參圓八拾錢稅拾六錢

生命に關する思想變遷の歷程を釋ね。最新自然科學の見地より生活現象に向ひて明晰なる解釋を下し、殊に實驗遺傳學說の如きは叙說の巧妙さながら掌を指すが如く、而して之に附するに、生命人造論として世界に喧傳せしシエファー氏論文を以てし、錦上花を添ふるの感あらしめし生命論は今や版を新たにするに當りて、更に幾朶の花を加へたり。曰く膠質化學と生活現象曰く原素の循環と空中窒素の利用曰く營養の眞相と食物の人造曰く觸媒作用と酸酵素就中防禦酸酵素と姙孕及び病の血清診斷の如き人間に於ける遺傳と人種改善學の如き、一は醫學界に於ける一新生面を開拓して近世學壇の耳目を驚かし、一は永遠の福祉を人生に齎すべき一大使命を帶びて新たなる活動を始め、天下經世有識の士をして齊しく思を致さしむるもの、斯くて六百頁餘の尨然たる大冊子一度卷を繙けば讀了せずんば止まざらしむ。尙序文に於て著者は『生命論』反駁者を反駁し、且つ終に詳細なる索引を附せり。

發行所　東京市麹町區平河町五丁目卅六番地
振替貯金口座番號東京二〇九一四番　洛陽堂　電話番町四二五八

上澤謙二著

耶蘇傳

四六判三百六十頁餘
美裝箱入挿畫十枚
定價一圓五十錢
送料八錢

是れ『眞實の耶蘇』にあこがれ渡りし一人が只管此の一道に沒頭して得たる所を正直に開陳したるもの。敎理の光と傳說の雲深き所に封じ了られんとする『彼』を、血と涙と努力の現實の世界に取戻さんとしたるもの也。著者年齒未だ若く、其立場は極めて自由にして、何等妥協を知らず、束縛に累せられず、直に耶蘇の心胸に迫りて其眞相を闡揚し來る。

全篇悉く是れ敬虔と大膽の奇異なる交錯、冷頭と熱腸のいみじき結合なり。眞實の耶蘇を求むる現代の人々に一脈の共鳴、一個の解決を與ふるものあるを信じて疑はざる也。

東京帝國大學醫科大學敎授醫學博士　永井潛先生新著

再版發賣

生物學と哲學との境

菊判七百頁純白總布製天金美裝箱入
金價金參圓八拾錢
送料金拾六錢

科學の嶺と、哲學の峰と、聳え峙つ其の間の深い〳〵谷底に、碧の如き生命の泉が湛えて居る。其處に『物』と『心』が神秘の影を映して居る。『人』と『自然』が樂しき踊を舞て居る『主觀』と『客觀』が溫き握手をして、最も崇く最も大なる天啓に耳を傾けて居る。而かも科學の嶺に得々たるものも、哲學の峰に超然たるものも、到底此の天地の大觀に接することは出來ぬ。之れに接することの出來るのは、嶺より峰に向ふ聖智の人、峰より嶺に進む圓覺の士でなければならぬ。曩に『生命論』を公にして、洛陽の紙價を貴かゝらしめ「醫學と哲學」を出して、斯界を驚嘆せしめたる著者は今此の大觀を提げ來りて讀者に說明せんと努力して居る或は生命研究の眞諦を論じ或は知識生活の第一步を說き、或は心身の影響を叙し或は兩性相關の妙趣を述べ或は自然死の研究に入る。材は人を得て其光彩を放ち、人は材を待て其妙腕を揮つて居る。思ふ自然と人生とに馳せつゝある天下有識の士は、此の書を繙いて必ずや莞爾たる者あるであらう。

發行所　東京市麴町區平河町五丁目　振替口座東京二〇九一四番　洛陽堂　電話番町四二五八

畔上賢造著

悲哀より歡喜まで

四六判布製箱入
定價 九十錢
送料 八錢

これ著者が信仰の告白である。十二年間の心靈的實驗を記せるものである。著者少にして哀愁の囚ふる處となりてより眞理と光明の探究に從て科學、文藝、哲學等に於て之を發見する能はず、かの盛なる近代思想も著者を救はず、舊き基督教にも新しき基督教にも滿足せず、遂に自らキリストの生命を採りて、其救濟を實驗し以て歡喜法悅の境に入つた。此の生きたる實驗を語れるものが本書である。惱める人に基督の救濟を示して心靈の飢渴を醫し根本的の安心を與へんとは著者の願である。

トルストイ著　加藤一夫譯

我等何を信ずべき乎

四六判五百頁餘
布製函入
定價一圓五十錢
送料 十二錢

自分は此譯を出さゞるを得なかつた故に出すのである。曩きに『我等何を爲すべき乎』を讀んだ讀者はトルストイをして斯る思想や生活に到達するに至つた其根源を知らねばならぬやうである、げに我等何を爲すべき乎に表はれたるトルストイの偉大は彼が此書に於て表白したるが如き、誠實深刻なる彼の宗教彼の信仰によるのであつて、こは實にトルストイをして偉大たらしめた最初の力である。收むる所『我宗教』及び『宗教とは何ぞや』の二書にして一つは彼の宗教を知るに足り他は彼の宗教觀を窺ふに足る、トルストイの力と人格と偉大とを酌まんと欲するものは先づ此の書に來らねばならぬ、基督者は其一切の被せ物を除かれたる眞基督教を知り其他の者は眞宗教を得るであらう。

トルストイ原著　加藤一夫譯（再版）

我等何を爲すべき乎

四六判六百頁餘
クロース製函入
定價一圓六十錢
送料　十　二錢

若し『我懺悔』がトルストイが永遠的生命の苦悶と憧憬であるならば『吾等何を爲すべき乎』は彼の人類的生命の良心的苦悶と其の解脫とである。トルストイの偉大は單にその文學的表現の上に於てゞも古今獨歩であるが、更に偉大にして更に深刻なる彼の價値は、その永遠的及人類的苦悶と憧憬との中に於ける彼の不可抗の促迫力でなければならぬ。何人か彼の深甚なる苦悶の叫びや喘ぎの聲に敬虔の至情と靈感の涙なくして對し得よう。『我懺悔』に於ては巣より落され し雛鳥の悲しみである。『吾等何を爲すべき乎』に於ては誤れる自己の生活の眞狀を見せつけられた驚愕と雄々しい自己革命の大願發起である。寔にこれ萬人の書にして人類最高の福音たり蓋し惱める現代に對する唯一最高の贈物たる可きを信ず。

海老名彈正序　帆足理一郎著（再版）

宗教と人生

四六判　五百頁
布製　箱入
定價一圓　卅錢
送料　八　錢

古き宗教は廢れ、古き藝術は毀たれ、古き哲學は破産して今や道義の根柢危機に瀕せり。社會は尙階級の傳習に囚はれ、少數は多數を壓倒し、個人は徒に個我の權威を絶叫して赤裸々の野獸性を暴露し過てる自然主義、本能主義、生命主義に青年の心血を腐らし、刹那的感衝的朝三暮四の生涯を以て自己創造と誇稱し、自我實現と迷想し、而も精神生活の貧弱寂寞訴ふるに由なからんとす。著者は多年シカゴ大學大學院に宗教哲學を專攻し同大學神學科長マシユース博士より『大秀才』と稱せらる。多年人生の波瀾に處して內的奮鬪の生活に血と涙の谷を潛りし著者か其清新なる思想の緣光と敬虔なる信仰の白熱とは相俟つて讀者の心胸に一味の靈光の閃きを傳へん。

露國ソロウイヨフ原著　關竹三郎譯

神人論

四六判三百頁餘
布製箱入
定價一圓二十錢
送料八錢

本書の原著者は露國近代隨一の哲學者にして、トルストイと並び立てられたる露國思想界の二大柱なり。彼の哲學は深く宇宙實在の根本義に觸れ、本源的生命の實相と其の表象とを語ることに於て遙にオイケン、ベルグソンに勝るものあり、今や全歐洲に認められ、彼の深遠なる哲學は枯渴せる心靈に蘇生の力を與へつゝあり、譯者は熱心なるソロウイヨフの研究家、譯文は明快透徹正に之れ最近本邦思想界最大の收獲たらん。

醫學博士
文學博士　富士川游著

金剛心

四六判全一冊
定價五十錢
送料四錢

迷ふて行く所を知らざる凡夫に對して、眞實悲願の方向を示す。著者僧侶ならざるが故に、說く所却て因襲相承の弊を離れ欣求歸命の眞意を語り得るの便あり、淨土眞宗の安心の要訣を明にし、眞實に生きんと欲する人の宜しく一讀すべき書なり。

（內容）

○無佛無法○機の深信○佛と凡夫○業種と因緣○彌陀の誓願○安樂淨土○無碍光佛○慈悲の親○攝取不捨○一心歸命○如來の慈悲○佛凡一體○生佛不離○報恩謝德○現世の利益●附錄○淨土眞宗○四法建立○願力廻向○阿彌陀佛○六字名號○一心歸命○即得往生○淨土往生○報恩行業

醫學博士　永井潛序　兒玉昌著（再版）

滅び行く宇宙及人類

四六四百五十頁
布製箱入
アート紙挿畫廿枚入
定價　一圓四十錢
送料　八錢

萬物は日夜流れて愁人の爲めに暫くも止まらず、流れに浮ぶ泡沫は且つ消え且つ結びて將に何れに歸せんとはする。宗教迷多くして此の疑を解く能はず、哲學光薄くして未だ此の眞相を穿ち得ず。著者思を玆に潛むる事多年、今や一點螢火の如き科學の灯を掲げて此萬有の流れの末を探らんとす。上は日月星辰より下はアメーバ體内の現象に及び、全篇を貫くに勢力分散の原理に基づく佛教の寂滅思想を以てす。世の惱める者、迷へる者、冀くは本書に依つて始めて宇宙の目的人生の歸趣を明にするを得んか。

279
188

RAKUYŌDŌ
KK
JAPAN

終